演藝畫報

十一月號

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年十月廿一日印刷（毎月一回）
昭和十一年十一月一日發行（一日發行）
「通算第」第百廿二輯第十一年十一月號

梨園の名門市川右團次を偲ぶ

—新劇の大劇場公演問題序詞—

俳優百人百話

秋の超特作品近日封切
東日大毎連載・菊池寛原作
新道
（前篇朱實の卷）
（後篇良太の卷）
原作……菊池寛
脚色……野田高梧
監督……五所平之助
撮影……小原譲治
田中絹代
川崎弘子
佐野周二
上原謙
佐分利信
桑野通子

風味必ず御氣に召す
天ぷら御料理
季節向御料理
佛蘭西御料理

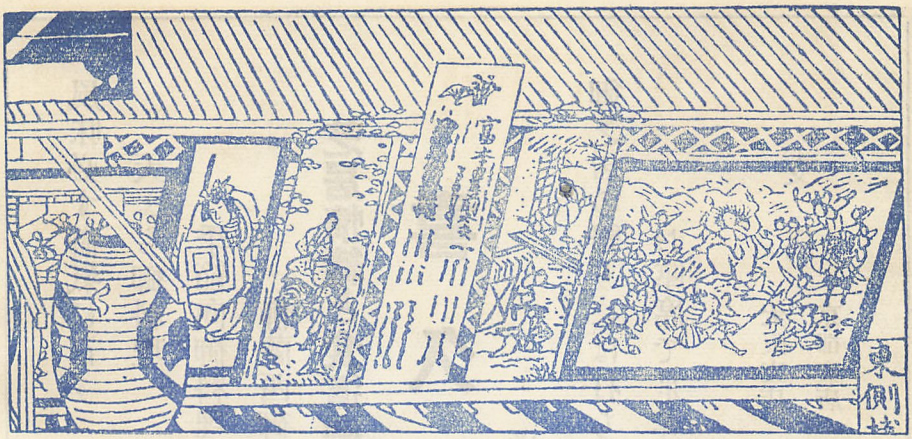
芝居情緒と食道樂

喜久屋食堂

道頓堀戎橋北詰

御芝居の歸りには打ち揃ふて
お座席で是非御會食を！

支店
大阪支店　心齋橋筋八幡筋角
北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋



★道頓堀 十一月號 目次★

トビラ（女形） 富田英三

グラフ

●「近江源氏先陣館」舞臺面 ○東京大新派アップ四景
●宮本武藏三景 ○關西新派劇「浮名三味線」二景
●「雪地獄」の扇雀と小太夫 ○〃「地下室の午後」一景
●乘合船惠方萬歲舞臺面 ○ライカで描く（十月興行より）
●風流深川唄舞臺面 ○文樂
●「人生の日かげ」舞臺面 ○〃「鶴山古跡松」舞臺面
●「續々二筋道」舞臺面 ○〃「馬方丑五郎」舞臺面
●「廿六號隧道」舞臺面 ○〃「近江源氏先陣館」「近頃河原遠引」舞臺面

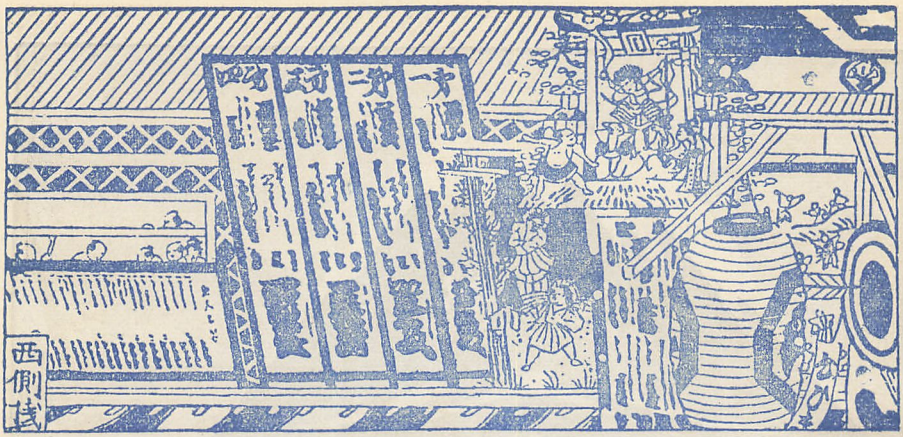
新劇の大劇場公演問題序詞……西田眞三郎（一四）
文樂座よ進め……高谷伸（二四）

◆傍白

……大木戸徹（六二）
市川右團次を憶ふ……高安吸江（一六）
家升君……青木月斗（一八）
蟲時雨……食滿南北（二〇）
故人の思出……阪東壽三郎（二三）
最後の競演……林長三郎（二三）
右團次一代記……大川澱江（五六）

在りし日の面影を語る

宮本武藏の脚色を終へて……瀨川春郎（三三）
大阪劇壇のこぼれ……木谷利夫（六〇）



劇壇ゲキダン

道頓堀……河合武雄（一六）
幕間……英太郎（一六）
役者……山田九州男（一八）
の……金間……小堀誠（一九）
給……柳永二郎（一九）
切符……大矢市次郎（二〇）
の……虫……花柳章太郎（二一）
舞臺……土……伊志井寛（二四）
青……大阪……若葉蘭子（二六）
役……捨……
の……廣……
……助……
……師……
……わ……
……た……
……し……
……の……
……龜……
……さ……
……ん……

隨筆ズイヒツ

女優百態

色々な顔……たもつ生（三七）
珍々歌舞伎漫畫レヴュー……大槻たもつ（三八）
煙に卷かれた勘彌問答……辰井じゅん（四〇）
Kの字にしてやられる話……文・畫 櫓万平（四一）
その道の先驅者に戀愛道を訊く……文・畫 富田英三（四三）
見合ひ……文・畫 千塚榮（四三）
妹……畫 辰井じゅん平（四四）

リポントウドセクシヨンヨシク

水谷八重子の卷
瀧蓮子の卷
山岸しづ江の卷……紅文山人（四八）

大阪夏の陣……（五一）
新道……（五五）

演藝飛行便……（四五）
スピーカー……（四五）

觀劇の常識……永樂庄三郎（五二）
食道樂……比左次（五九）
編輯後記……源多德三郎（六四）

★表紙……鳥海青兒
カット……正樹

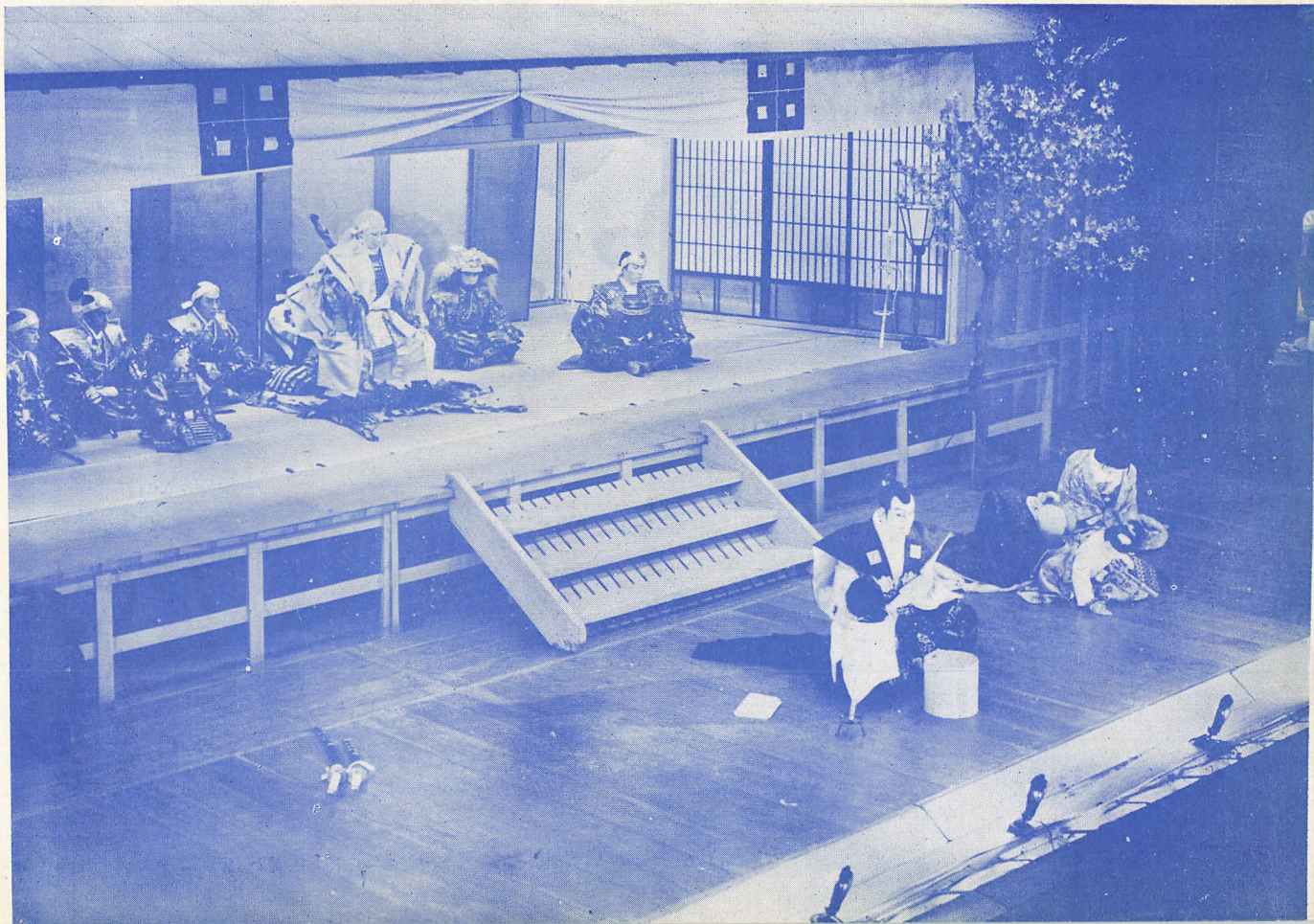
酒銘
白雪
摂津灘浜
小西酒造株式會社

歌舞伎若人たちの熱と、狂言の興味で、浪花座は連日満員全くつめも立たない大盛況

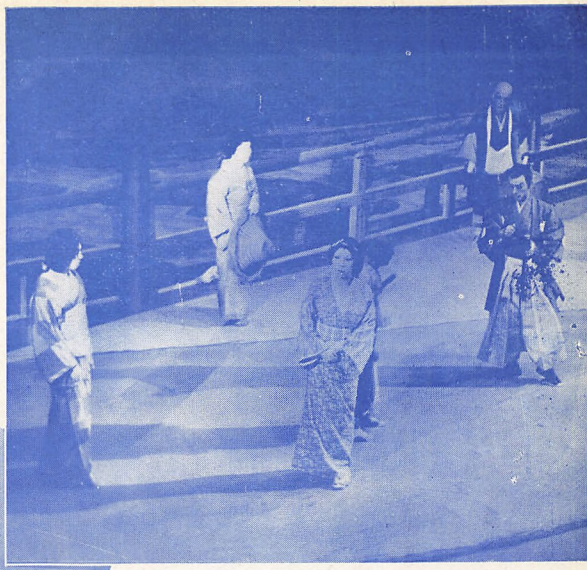
「近江源氏先陣館」

舞臺面

盛綱役の扇雀は「近江源氏先陣館」でかく語る——「今度は亡父がやらなかつた注進受けも演りますし道具も一杯です。これは亡父がいつも劇評家の皆さんから言はれ乍ら他の事は他人の意見を容れる方だつたのに、この盛綱だけは自分の思ふ通りに演じ通した、その亡父が出されて居た注文を私が今度やつてみることになつたのです」と因みに小太夫は和田兵衛でつき合つてゐる。



東西合同若手歌舞伎
十一月の浪花座



面臺舞「藏武本宮」

九月浪花座で新組織以來、これ
から劇壇を背負つて起つ氣概
を示した一座は更に精鋭を加
へて熱演

古稽臺舞「藏武本宮」

(上)「雪地獄」小太夫の藤吉

當り狂言揃ひで久々來演!!

東京大新派劇

第一 廿六號隧道 二幕 巖谷三一作（中央演劇所載）

第二 人生の日かげ 五場 川口松太郎作

第三 續々二筋道 一幕 瀨戸英一作 花柳巷談

第四 風流深川唄 三幕 川口松太郎作並舞臺監督

◇運動會やお客樣の御招待は◇
雨にも風にも心配のない誰が見ても面白い當座の東京大新派劇とお決め下さい

◇團体御觀劇・御得意樣の御招待は特に御相談申上升

◇壹等席は五日前より・貳等より櫻までは前日より發賣

前賣團体專用電話（戎）二八二八六

初日は割引値段

◇初日・二日目三時開幕◇

初日割引	
櫻	三十五錢
菊・五十五錢	
參等・貳等	一円八十錢
壹等	二円十五錢

十月一日初日 毎日四時開幕 歌舞伎座

金鶏印罐詰二大製品

1. 純良精選の牛肉
   で御座います
1. 不意の御來客に
1. 御酒ビールの御友に
1. キャンピングに
1. ハイキングに
1. 各地百貨店
   著名食料品店
   に販賣致して居ります
1. キンケイ印を御指定下さい

洋酒・食料品・罐詰問屋

大阪市東區豊後町三番地

株式會社 横山商店

○觀劇や映畫？
○道ブラの節？

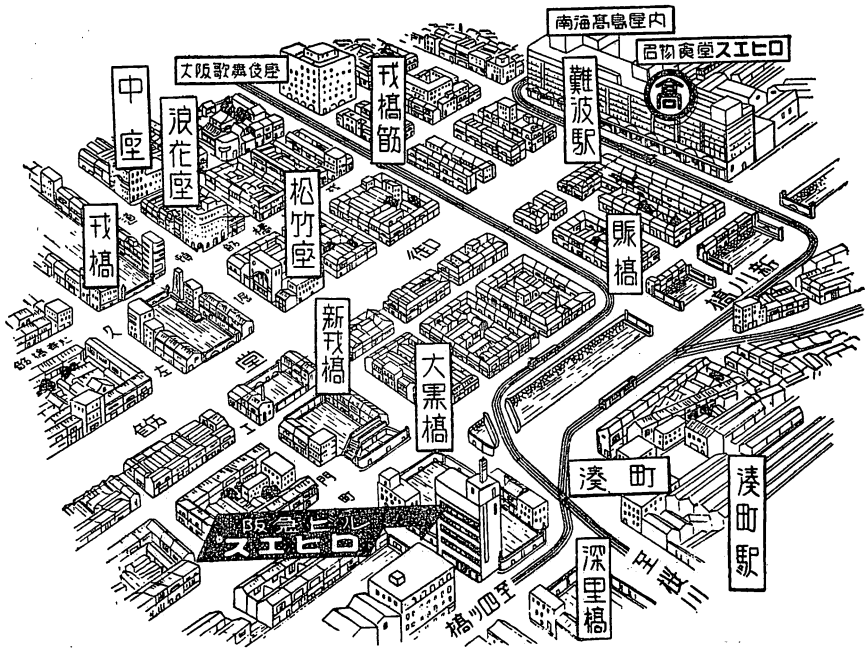
相談が出來て
いそぐ湊町

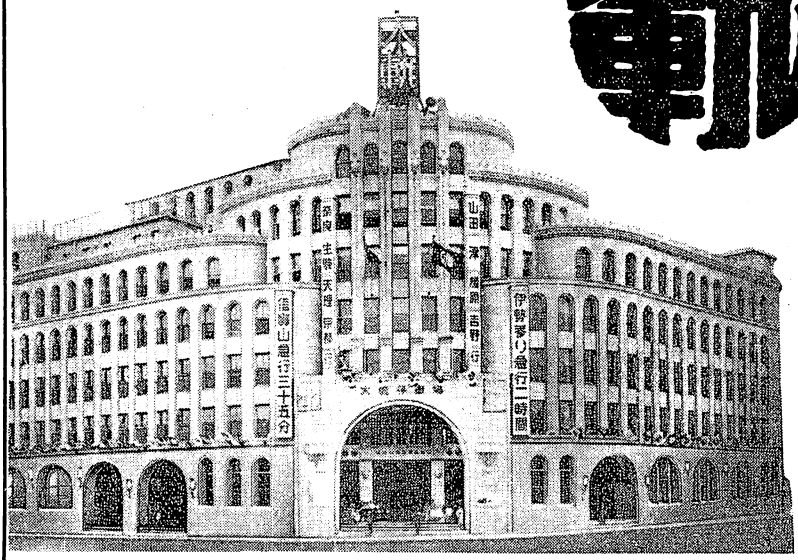
明朗快適

晝間は明朗　御氣分第一
夜間の眺望　大大阪第一

大阪唯一ビステキ專門店
湊町スエヒロ

湊町北詰（阪急ビル）
電話櫻川四七九三番





お買物は大軌で

自慢の百貨

地階	食料品・果實・花卉類
1階	菓子・煙草・藥品・商品券
2階	雜貨・時計及貴金屬
3階	呉服類・外商部
4階	雜貨・お子達用品
5階	大食堂・御家庭用品
營業時間	賣場　午前九時より午後九時迄 食堂　午前十一時より午後十時迄
定休日	毎月八の日（日曜祭日の際は翌日） 食堂は年中無休
無料配達	大阪全市及大軌沿線無料配達 吉野線參急沿線驛留無料配達

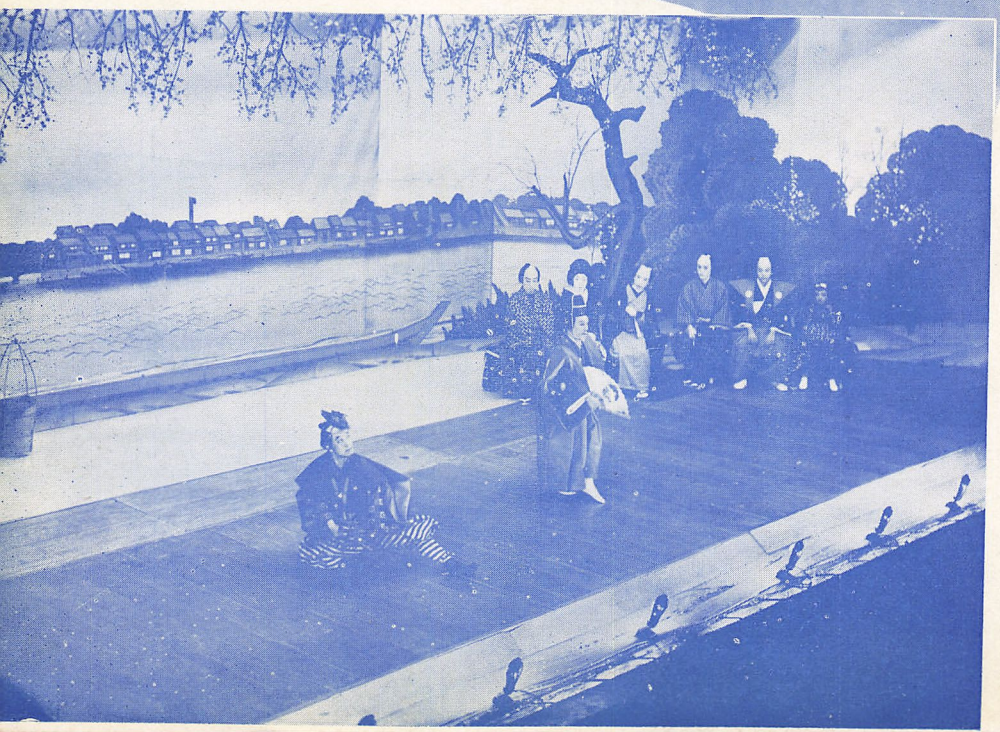
大軌百貨店

大阪上六　電話天王寺三一三一・三三三一番

「面臺舞」藏武本宮

扇雀の音次に小太夫が手先藤吉と遊人直
七の二役で息もつがせぬ競演。
十月東京歌舞伎座で菊吉が演じて大當り
をとつたけだし興味一しほであるる。

次音の雀扇「獄地雪」



「乘合船惠方万才」舞臺面

十一月の

歌舞伎座と

浪花座

「人生の日かげ」舞臺面

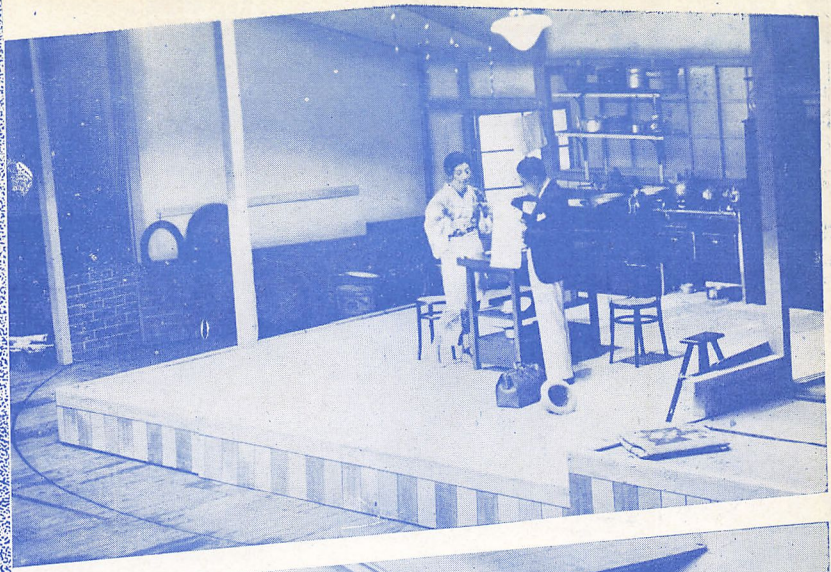
（東京大新派）

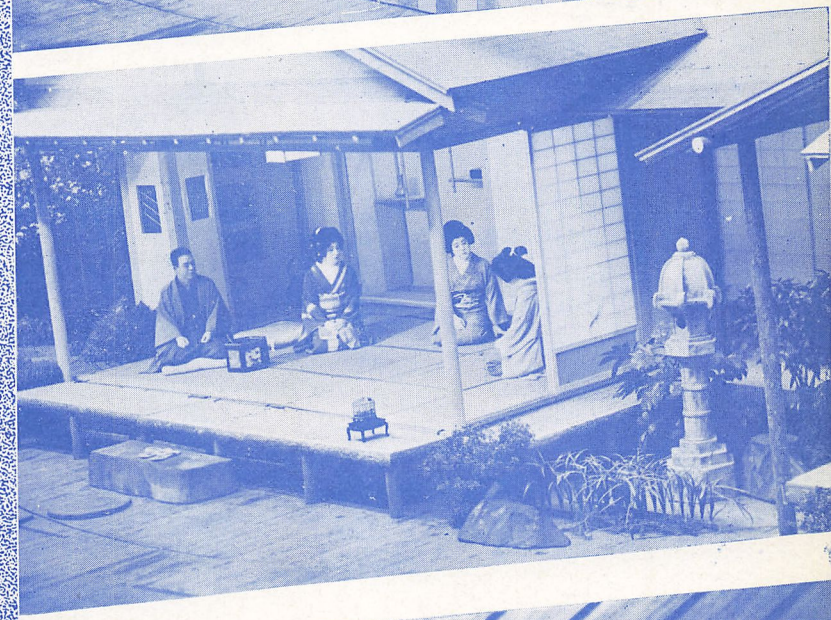
花柳巷談「續々二筋道」舞臺面

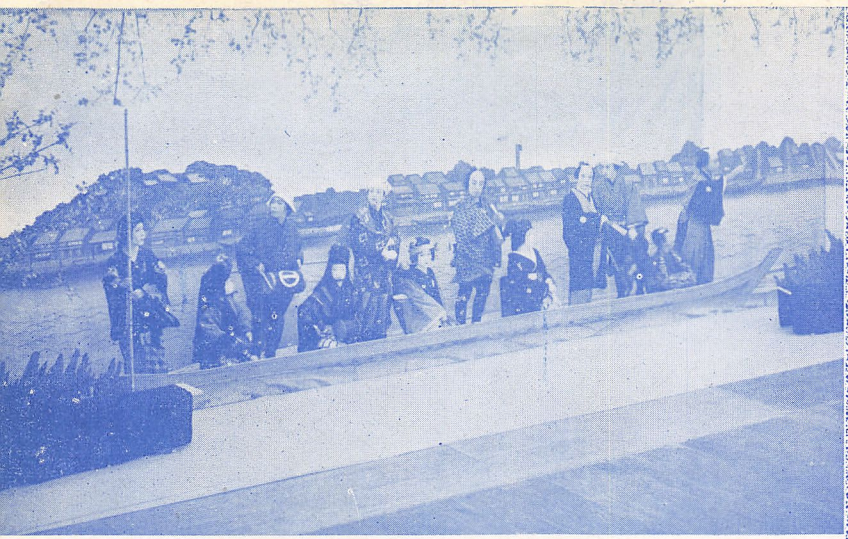
（全）

「二十六號隧道」舞臺面

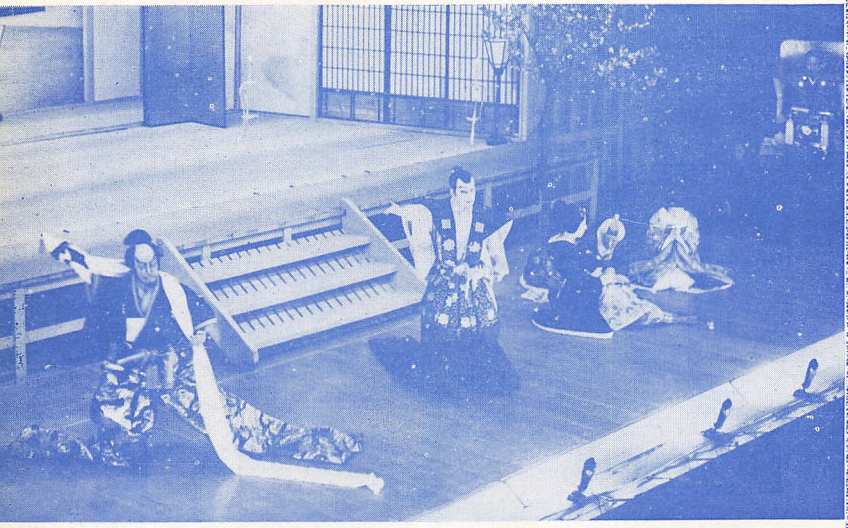
（全）



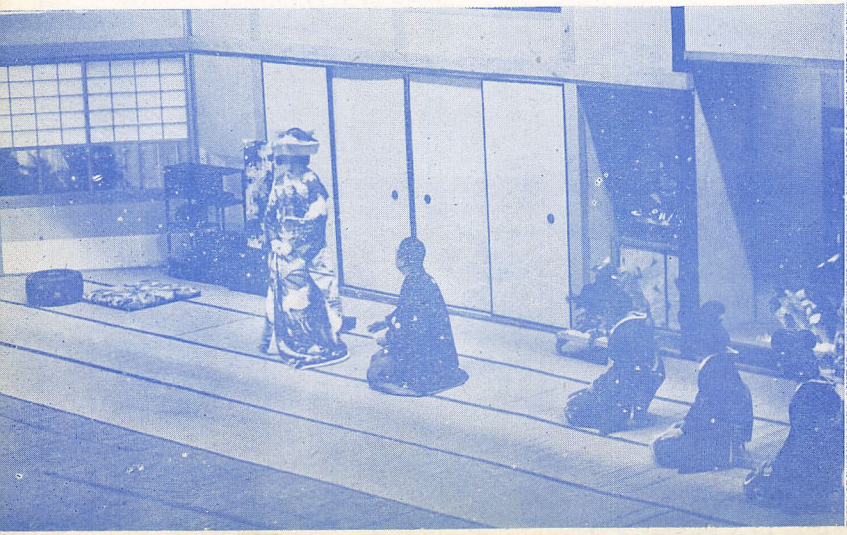




「乘合船恵方萬歳」
（若手歌舞伎）



「近江源氏先陣舘」
（全）



「風流深川唄」
（東京大新派）

上「續々二筋道」

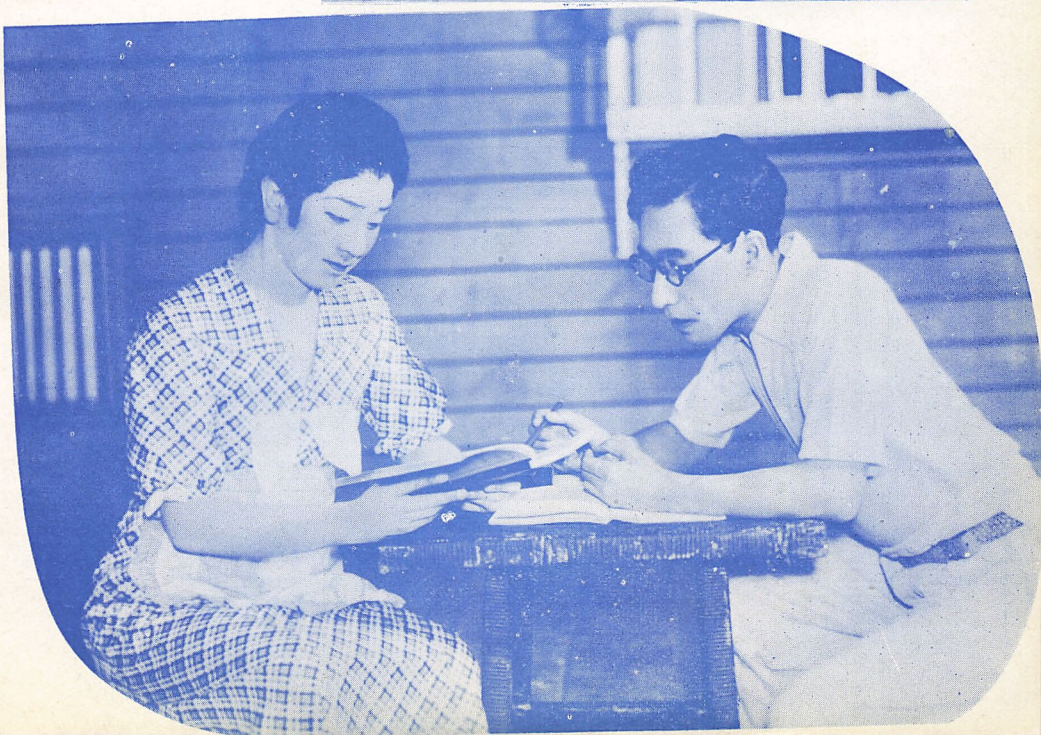
河合喜多村を始め、伊志井等を中心の野心篇で十一月歌舞伎座興行唯一の悲劇である

（河合の……おすが）

下「人生の日かげ」

伊志井の……伊藤直七

花柳の……桂子



十一月の

東京大新派

歌舞伎座

右「二十六號隧道」

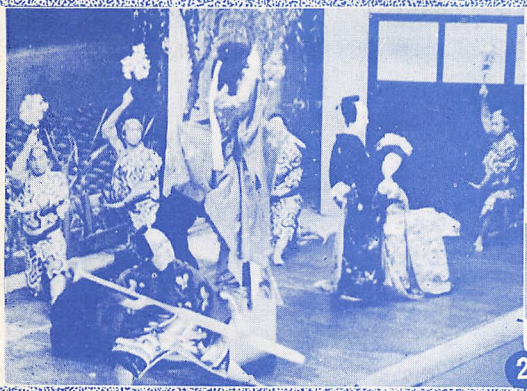
〽道は二筋、ふたりのこゝろ
きつく結んで、どちへ行こか
戀の極樂、情の地獄
それは此の世の給そらごと
エ、まゝよ
どつちしたつていゝじやないか

（寫眞　喜多村のおきち）

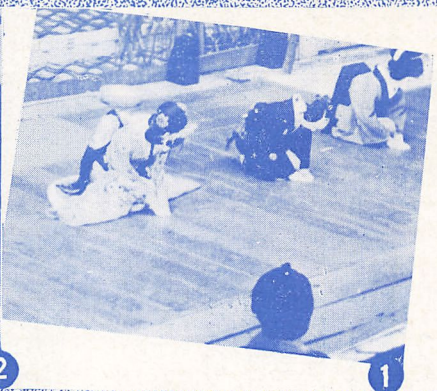
下「風流深川唄」

大矢の料理人長藏
花柳の深川亭娘　おせつ

ライカで描く



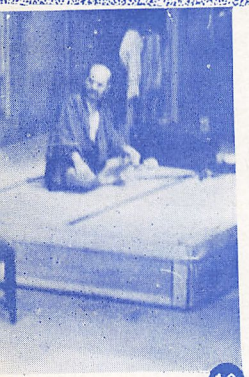
2



1

6

5



10

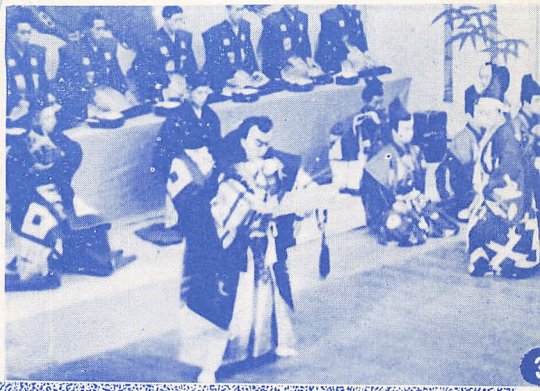
9

これは十月の道頓堀で、物凄い人氣の爭覇戰を演じた、浪花座の「前進座」と中座の「井上水谷合同劇」の優秀舞臺面です。

(1)(2) 前進座の「道行念玉蔓」は一座總出演で好演、劇通家をやんやと云はせたが、両花道を使つての褒詞は今の觀客には大變珍らしがられ、中にも粹客は自らその席から俳優の台詞に乘つてほめそやすなど、約束以外のなごやかな寸景を描き出すのであつた。

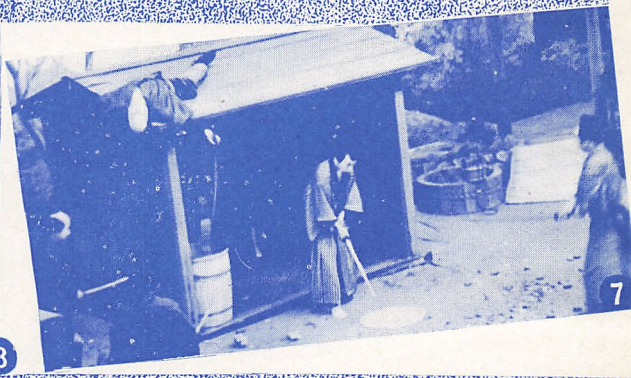
(3)(4)(5) 近頭、これ程話題となつたものはない。昭和八年宗家默認の形式で上場を敢へてした勸進帳を今度は晴れて大阪で演じるといふので、大した人氣だつた。然しその舞臺を見るまでは何人も、あれ程やりこなし將來に

4



3

8



7

11

（撮影・大橋孝一郎）

輝く約束を殘さうとは思はなかつたであらう一座は二十五日で浪花座を打上げると引續き朝日會館で尙二日これを公開した。

(6)(7) 長谷川伸氏の「人斬り伊太郎」一べんは一べんより、何かエ夫新たなところを見せる前進座の殺陣は定評あるものだ。所謂三尺物に入つては長十郎翫右衛門の名コンビがうらやましい位だ。

(8)(9) 中座の「兄いもうと」、(10)「彦六大いに笑ふ」(11)「新道」など、井上水谷にとゞまらず一座今度の好演は既に述べつくされて云ふ事もない。

兩座は一日より二十五日まで競演して、どちらも大當祝の金星をかち得て引あげた。

關西新派

十一月の角座

十一月の角座は引續き關西新派劇の五の替り、「浮名三味線」を呼び物に、亀屋原德氏の「生ける聖母」の續演、それに中田正造のための喜劇を一幕加へた陣容。

「浮名三味線」は、額田六福氏脚色の興味横溢の十一場。深川の船頭上りの遊び人安藏と、同じく深川藝者で一枚繪にもなつた小紅屋お初の、まるで江戸ッ子の見本みたいな夫婦には、都築、梅野井の名コンビが扮して力演。中橋藝者のお里、主家の娘おきたに、最後にお初にまで關係をつけて行く番頭忠助は中々の色男。

各優が邦枝調のあの台詞を生かして江戸下町情緒横溢。

濱松屋や源治店のやうなゆすり場もあつて頗る好評。

連日大盛況。

「浮名三味線」

安藏……都築

お初……梅野井

お里……瀧

おきた……小宮

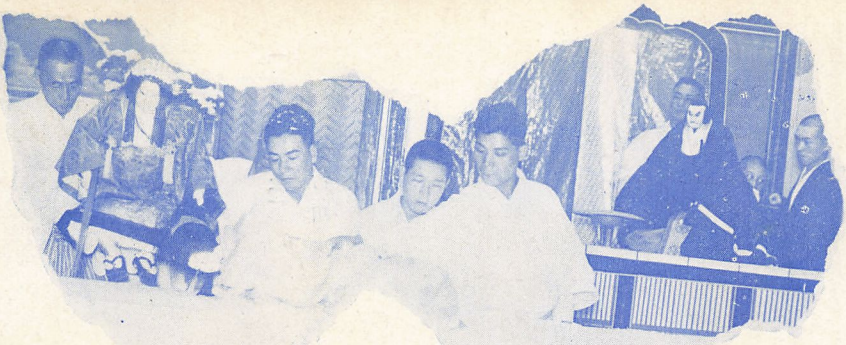
忠助……波村

お里……宮

「地下室の午後」
笈川と市川

「浮名三味線」

十一月の文樂座



新曲「丑五郎」の興味に加へ、駒太夫初演の「堀川」、今月は新進花形活躍の舞臺である。

「松跡古山鶴」
「郎五丑方馬」
「舘陣先氏源江近」
「引達の原河頃近」

新興キネマ本年掉尾の

傑作時代劇陣！

綺羅の源内

阪東妻三郎主演
山口哲平監督

青空浪士

大友柳太郎主演
押本七之輔監督

鳴門秘帖

嵐寛寿郎主演
吉田保次監督

仇討膝栗毛

月田一郎第一回主演
森一生作品監督

沓掛時次郎

原作　長谷川伸・脚色　原健一郎
監督　西原孝・撮影　吉田清太郎

淺香新八郎
山田五十鈴
第一回主演

新興キネマ
大阪支店

キッコーエー醤油
伏見で生れる
天下の銘醸
マルタケ醤油
丸竹
丸竹醤油株式會社

御觀劇には

芝居の切符はプレイガイドでお求め下さいますのが一番お德で御座いますお場席もよろしいし一枚の切符でもすぐお屆けいたしますことに團體にて大ぜい樣御觀劇の場合は特にお安く相談いたします。

プレイガイド觀劇會

月組新會員募集中

月額　金壹圓也

詳細は當店へ

御一報次第プレイガイド月報御粗呈致します。

大阪渡邊橋　朝日ビルー階

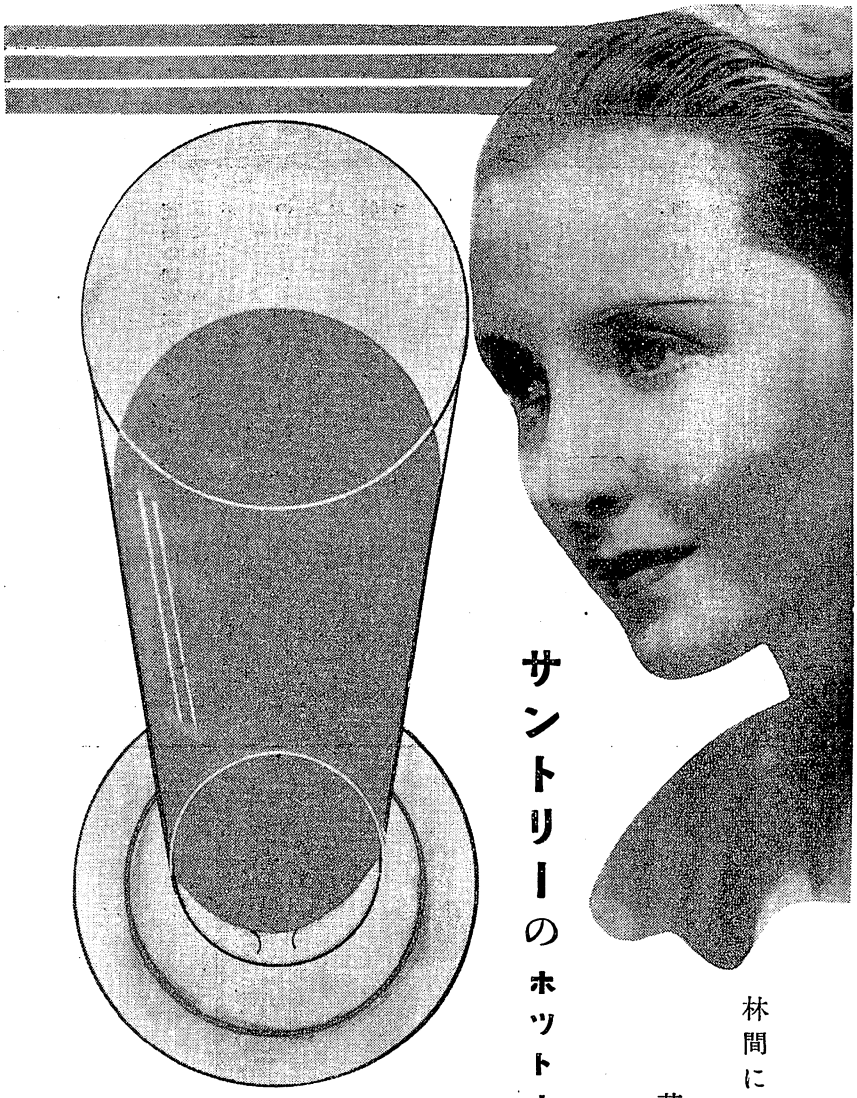
北濱(23)　三〇三九　五九九三　番

プレイガイドの御利用を

一般宣傳廣告取扱

岡本商事社

大阪市住吉區住吉町一六五八



サントリーのホットウイスキ

林間に紅葉を炎いて
茶を呑むもよし
に秋宵の興を呼ぶ
また樂しからずや

道頓堀朝日座前
電南一六六八

月刊·演劇研究·雜誌

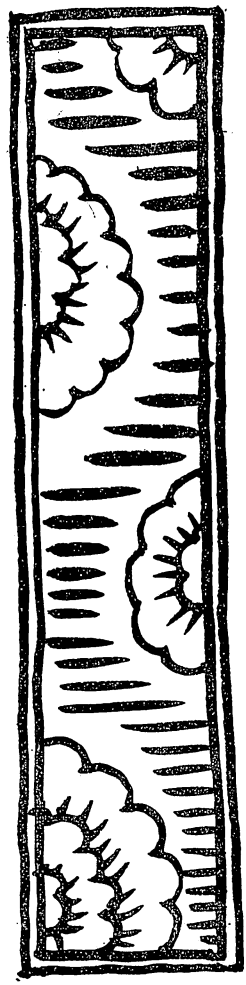
戲劇

第十一年

十一月號

第百二十二輯

劇論



どうとんぼり

新劇の大劇場
公演問題序詞

西田眞三郎

〃新劇の職業化〃
〃新劇の商品化〃

かうした言葉がかりそめにも新劇運動者の口をついて出て來たといふ事は、嘗て新劇團の仕事に一瞥をくれた事のある人々にとつてはたしかに一つの大きな驚異であるに違ひない。

汎い演劇の部門の片隅の砂場で遊んでゐた新劇團やそれらの運動者が眞面目な意圖のもとに荊棘の道を踏み込んだのは極めて最近の事であつた。新劇合同の結成後一年になるかならない間に、急激な發展を示して、職業化を唱へ出すに至つた事實は新劇への深い認識を促す契機ともならう。

十餘年前大阪には小さな素人劇團の流行した事がある。さうしたものがいづれも新劇團と呼稱されてゐた。出し物は大てい言ひ合したやうに飜譯劇を並べてゐた。演技者はいづれも素人で所謂芝居好きなお坊ちゃんであつた。演技は全くなつてゐなかつた。上演脚本の筋さへもそうした演技では完全に觀客に理解されない場合があつた。舞臺裝置は支那劇風に象徴的ではあつたが、粗雜で演じられる劇にはそぐはなかつた。それでゐて開演時間はだら〳〵と手間どるらしくいたづらに欠伸を誘ふたものであつた。

さうした劇團の人々はそれでも眞劍だつた。けれど坊ちんの遊びに過ぎないと觀られて、崩れて了つた劇團もあつた。

「背景さへロクに作れないばかりか、芝居は下手で、全くなつてゐない。」

薄情な話であるが、どの方面から見てもこの種の獨りよがりの新劇團には同情が持てなかつた。併し今こゝに私だけの記憶を辿つて見ると、私はさうした新劇團の私演場で只一ついゝものを發見してゐた。それは大部分の觀客と舞臺上の演技者との比較的こまやかな親炙的な空氣であつたと思ふ。この場合觀客とか觀衆とかいふ言葉は當らない。すべてが會員組織であつた。

この會員組織網の擴大强化こそは新劇團をもり立てる唯一の力であつたのであらうが、新劇運動者は殆んど新劇愛好者の大部分を失つて崩れて行つたらしい。劇團組織の深部にメスを入れたわけ

ではないから斷定はをこがましいから遠慮はするが、過去の新劇團倒伏の責任は新劇團それ自體が負ふべきであつたと思ふ。

今日大阪協同劇團となつた事前の各劇團が血みの努力に對してはたゞ感激するばかりである。泥東京の新協、新築地両劇團が十月の朝日會館で行つた共同公演は三日間五回の開演が滿員の盛況であり異常な好評であつた事は新劇壇のため萬丈の氣を吐いたものである。大阪協同劇團が最近文樂座及び北陽演舞場に行つた公演も劇團經濟の上に損失を防ぎ得たといふ事である。共同、單獨そのいづれの公演にも赤字を出さなかつたといふ程度を維持し得たといふ事實の裏にそれ〴〵の支持者及び支援團體の擴大と强化を認めなければならない。同時に劇團組織の統制のよさと演技部の精進をも明らかに快く認められるのである。

過日の共同公演では新築地劇團がモリエールの「守錢奴」を演じた外に新協が藤森成吉氏の「轉々長英」大阪協同が丸能克彥氏の「裏町」を上演した。大體に於て創作劇を採り上げて來た新劇團近來の傾向も觀衆には飜譯劇より以上親しみが持たれて、劇團の興隆を助成する一つの力を生んでゐるとも見られる。

さて「新劇の職業化」の問題であるが、これは劇團經濟の問題で劇團當事者にその意圖があり自信があれば當然解決される問題である。既に新協劇團では月給制が實際に行はれてゐるといふ話であるが、到底演技部の一人がそれに依つて完全な俳優生活は營まれないであらう。毎月の定期興行がどれだけの金を儲けてゐるかは知らないが、新劇團の職業化は何と言つても尙早である。〃損はしないが儲かつてゐない〃事にほつと一息つぐやうな現狀で直に職業化を提唱するものがありとすれば、それは折角もり立てゝ來た劇團を一擧に粉碎する冒險者である。小金を貯へた男が一攫千金の夢を見るより危險性が多分にある。興行は或は思惑であるかも知れないが、少くとも眞面目な藝術運動乃至文化的運動が根底のない思惑に依つて行はれやうとする企みは絕對に排擊されてもいゝと思ふ。

〃新劇の商品化〃といふ言葉は或は〃職業化〃と同一の意味にも解されるが、〃興行的價値ある上演脚本の選定〃を意味するものとも見られ〃劇團そのものを商品化〃する意にもとられる。

嘗て或る新劇團を主宰する人に私は〃新派劇を演つて見たらどうだ〃と言つたことがある。それは全く冗談となつて了つたが、硬直して理論にのみ走つてゐるその頃の新劇團の芝居のつまらなさにつく〴〵愛想をつかして了つてゐた時なので〃見て面白い芝居〃を提案したにすぎなかつた。

今日にして新劇團が比較的甘い創作劇を採りあげて、而も寶らんかな主義に轉向して來た意圖を窺ひ見るに及んで、（勿論そこには時代の大きな流れが背景とはなつてゐるが）新派劇に一歩々々近寄つて來てゐるものゝあるのを感ずるのである。正硬な演劇の理論から新劇團の使命なり目的なりを論ぜられては、この際往生するが、少くとも新劇團が現在までの狀態では〃職業化〃の野心は拋つていゝと思ふ。併し乍ら現在の狀態を强化して行く事が出來れば、職業化は自らなされ、〃商品化〃も亦追隨的に行はれるであらう。

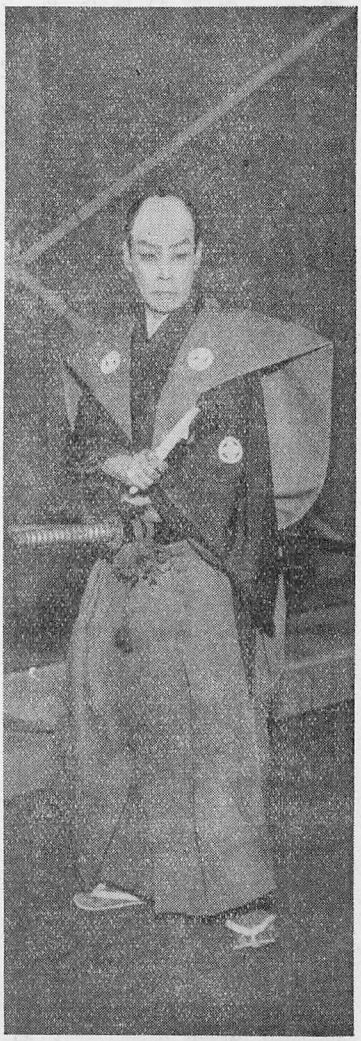
歌舞伎劇は今まさに黃昏である。その黃昏の薄明の中に顏を洗つて出直さうといふ市川左團次は在來の新劇運動にあき足らず眞の日本劇の創生を志した。在來の新派に物足りなさを感じた井上正夫は所謂中間演劇の試みをやつてゐる。新劇團の煩悶が〃職業化〃にあることは一層進歩的であるとも言へる。

私のこの小さな原稿は、〃新劇團の大劇場進出〃といふ課題への答案にすぎない。本題に入らずして筆を擱くやうであるが、大劇場的大衆觀客層の獲得は新劇團自らの商品化が徹底的に實現された曉の問題である。

（一〇・二六）

……の日しり在

面影を偲ぶ



あゝ梨園の名門

市川右團次

昭和十一年十月三日、關西梨園の名門市川右團次丈逝く――故人は大阪歌舞伎座十月興行に出勤の豫定であつたが腦溢血にて休演の止むなきに到つたもので、行きてなほ囃子となさむ虫の聲の辭世を殘してゐる。享年五十六、本名は市川右之助、丈は明治十四年一月、南區笠屋町に生れた。先代右團次(齋入)の實子で明治十九年三月角の芝居にて伊藤右之助と稱し「先代萩」の太鼓持が初舞臺、明治四十二年四代目右團次を襲名現在に及ぶ、同優は關西梨園切つての舞踊の名手として知られ、又齋入讓りの仕掛ものに得意で「鯉つかみ」「四ッ谷怪談」「法界坊」「五右衛門つゞら拔け」等は他の追隨を許さぬ專賣ものであつた。因みに遺族は未亡人博子さん遺兒達雄君(十八)親戚には阪東壽三郎丈がある。

市川右團次を憶ふ

高安吸江

蔦枯れし日の淋しさや風の色

右團次丈の急逝には驚かされました。先年起つた腦溢血が案外輕く、當時少々怪しかつた手足の運動も其後スツカリ治つて近來は地方で前通りの活動を續けてをつたし、イヤそれ處ではない此八月二十二日には南の日柄喜で催された新升忌に、しみ〴〵と故人の追悼談を試みた、其本人がそれから四十日經つか立たぬ中にもう此始末で、眞に

人生の無常迅速とは此事です。

今年五十六歳だから明治十四年生れですが、古い番附を繰つて見ると先代右團次が久々で歸阪し、忠信に望月を出した明治十七年二月、恰度その時改築された角の芝居に、伊藤右之助として公達實若丸の名が出てゐるのが、番附に名の載つた最初でしやう。尤此れは唯名だけで當時四歳の優は無論そうした役を勤めたわけではない。十七年から翌十八年へかけて角の番附には公達何丸などいふ役が右之助の名の上に附けられてあつたが、十九年からは役名でなく唯座本とだけで、和田清七が從前通り劇長となつてをります。

優の話によると役者としての初舞臺は六歳即ち十九年十一月で、先代萩の二幕目高尾のさげ切の場で太鼓持となり金時が〳〵を踊つたといふのですが當時の番附にはまだ座本とあるだけで二三の役名が附くやうになつたのは二十年の暮からです。

こんな古い時の事は私自身の記憶から全く消え去つて今は殆ど何も思出せませんが唯一ツ、それも手元の繪番附から記憶を新にしたのは明治廿三年十月の角の時です。

番附には英國法學士技藝士、日本文學博士末松謙澄譯と角書にして谷間の姫百合と普通の行書で題し、上の處へは、Composit from mr Belcer. m. Kley, translatel by mr K. Suwe matsu and mr. K. Ninomiya Dramatized by G. gakeshiba

と麗々しく二行に書き立てゝあります。

登場人物も男女共洋裝が多く、月明に若い男女がボートに乘る場面があつたりして、今日からは何でもないやうでも、當時として中々超モダンな企てでした。

(石川右五衛門)

一座は右團次（後の齋入）を座頭に我童、我當（故仁左衛門兄弟）珊瑚郎巖笑、多見之助、壽三郎其他で、大詰の舞踏會の場で一同がダンスをやる、とだけでは頗るモダンに聞えるが、今日のやうにオーケストラがある譯でなく、唯一臺のオルガンで琴曲の六段を彈くのですから悲しうなります。

こゝへ十歳の右之助と九才の東吉（即ち今の仁左衛門）とが洋裝の紳士淑女として登場し、二人手を組んでクル

〳〵と廻つて、所謂小人國樣の可愛いダンス振に大喝禾を博したのでした。

かく新奇が非常に歡ばれた此時代に育ち、殊に先代は既に明治五年に京で西國立志篇の巴律西をやり、其後錦織熊吉や團泰次などゝ益にザンギリ物を演り初め、それからケレンにして種々と新工夫を凝らしてたえず尖端的なことをしたがつてゐた、其齋入老人の許にありながら優は時代の影響とも思はれる新味を出すこともなく、亡父の遺業や茶の趣味を十分にうけ繼ぐことを敢てしなかつたのは如何にも殘念でした。

優が先代から讓り受けたものゝ中で一番ハツキリしてゐるのは酒の趣味であつたらしいが、しかも其爲に己が健康を害ふに至つたのは遺憾の極で、いつか其健康を顧慮して郊外に隱栖の地を探してゐると話してゐたが、求めてゐた其居住地が立派に出來上ると、其本人はもうそれを利用すべき餘命をもたぬといふのは何といふ不幸なことであらうか。私は時代や家柄に順應し得なかつた優を特に氣の毒に思ふのであります。

市川右團次・家升君

青木月斗

□

右團次君が、千燈君につれられて櫻の宮時代の草庵へ見えたのが俳人、家升としての初對面だと記憶する。その時、初曾我の隈取をうつした絹に贊をせよとあつて、

『勇ましの五郎見はやせ初芝居』　月斗

右の句贊は千燈君が持つてゐる。

□

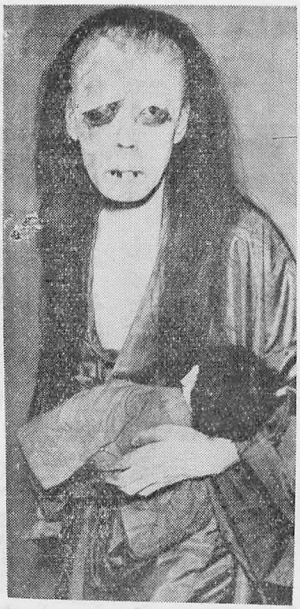
その時に右團次君の話で記憶に殘つてゐるのは、鴈治郎の話、仁左衛門の話である。

『成駒屋は、熱のある寫實で相手にならぬと叱られます、たとへば、手を握りあふやうな時に、そろツと握つてると氣に入らぬので、ぐつと握る。組みうちの時でも、ゆるくやつてると、氣に入りません。成駒屋にねぢ伏せられる時などは、あの大きな體で、ぐつと膝法師で背中を、壓られます。眞實、うんと唸らされて物も云へぬ時があります。暫く成駒屋についてゐて、此度

は松島屋の相手になる時は、同じやうに、ぐつと手を握りますと、振り放されます。『何ぢや、いやらしい』と叱られます。それが舞臺の上で叱ツ々々とやられます。あとで、『芝居を知らぬか、芝居といふものは、觀客に見せるもので、喜びや、悲みを、實際以上に見せるのが芝居ぢや』と云ふ調子です。

鴈治郎の實と、仁左衛門の虚と、實に虚實論の實行者、實驗者の兩人に兄事した、右團次君の談片は甚だ面白く聽いた。

□



（岩おの談怪谷四）

右團次君の右之助時代から舞臺の人としては五十年の長い間知つてゐるが親しく接したのは近來の事である。誠にもの靜かな紳士である。

それから句會などへも顔を出す事がある。風水災で半壞の櫻の宮庵へ來た時も、夜遲く迄句談に耽つた事であつた。

右團次君の上本町の家へも先考齋入翁の法事の茶會に招かれた。茶を知らぬ、我等の爲に、特に一席を設けてくれた。伏兎、月村、千燈、その他の一座で、茶の手前は故人の才五郎老がつとめた。その時の酒宴も、主客がくつろいで、家升夫妻に、達雄君、齋入未亡人に、門弟の二三に傘宵君で、三時頃迄も長夜飲をつゞけてゐたのであつた。

□

右團次が九州興行の時は、筑前植木の王樹庵で句會をやつたり。（王樹に描いて貰つた繪の表裝は逝去の日に出來上つた由。熊本では、是山、香苗等と、阿蘇へドライブしたり。滿洲の新京では麻姑、霜天等と句話を交はしたり至る處で、俳家の歡迎、緩語に、家升君は全く喜んだ。家人や千燈らに『何故、早く、俳句の門に入らなかつたか。俳句の出來てゐる方々は、人間が違ふ。自分も、俳句の門を覗かして貰うて幸福である』と常々語つてゐたさうだ。

芝居の樂屋でも古集や雜誌は見てゐたさうだ。

□

今年の八月の太閤忌、京の仁和寺の句會にも出席して、歸途、鴨川の宴席にも列した。をりから雨中ながら如意ヶ嶽にとほつた大文字を賞した事であつた。

九月の子規忌、東光院萩の寺へも出席した。（去年は妻女と共々であつた）そして後の宴にも列した。それが最後の別れであつた。

□

よく接してゐた千燈曰く。右團次丈は俳優より俳人であつた。も少し壽命を與へて、俳人としてつくり上げたかつた。と。

□

達雄君も父をついで俳句をやるといふ。傘宵君が來て、達雄君が十年前の初舞臺の時に、誠に落ち着いて、堂々としてゐた事を具さに語つた。これは壽三郎君がゐるから安心な譯だ。

□

辭世の句として、

逝きて尙囃しとなさん蟲時雨

侍史傘宵の言に、主人は蟲が好きで地方興行の時でも蟲を買へ々々と云はれまして、樂屋には蟲籠を置きました豐中で住むやうになつたのも、蟲の聲が好きであつた事が原因の中の一つであつたやうに思はれます。

尙、今年の子規忌の題の『秋風』の家升君の句は何といふ淋しい句であつたか、然し佳い句である。

去りて行く　袂に秋の　風悲し

佛壇の燈のまたゝきや秋の風

父母の聲　聞ゆるや　秋の風

追悼唫　月斗

秋の夜の茶會約してゐたりしに

竝び見しよ雨に消えゆく大文字

蟲時雨

食滿南北

△故人の辭世

逝きてなほ囃子となさむ虫時雨

故人は晩年句が上手だつた、月斗氏について熱心に研究してゐた。故人の遺品には月斗、伏兎、兩子の外に大分さうした趣味をあつめてゐた。

△故人は酒をのんだ、さうして實におとなしやかにのんだ、故人は決して惡ふざけが好きであつた。

遺稿

家升　市川右團次

初霞芝居やぐらにかゝりけり

緋毛氈の棧敷古式や初芝居

揃へ著しお茶子かしまし初芝居

石切梶原

名刀の切れ味見よや梅の花

けをするやうな酒ではなかつた。

△故人はキチンとそれこそ樂屋にゐてもキチンと着附を合はせてゐた、ジダラクなといふ事は故人の平常にも見られなかつた。

△それは茶事をやるからであらう。さうしてそれは堂に入つてゐた、故人は船場風の役者であつた。

△故人は中々物事を輕々しくあつかはなかつた。私などはもつて手本にしなければならない。

△思案が長いと云はれたが、それは沈思默考の結果である、まだ病氣にかゝらない以前すでにあの名辭世をよんだ人である。

△私は故人の爲に大分に新作をしてゐる『聚樂物語』の秀次なども書卸しは故人の爲だつた。其他『兒雷也』を新らしくあつかつたものや、岡崎の猫を新らしく描いたり、其他所作なども大分に描いてゐる。秀次などは今から思ふと當時出色の出來だつた。しかしこの役を受取るにさへ故人は中々考へたものだ。

先代齋入翁は、私と故人とが秀次の問題で二時間餘も話しこんでゐるのを聞いて、私を茶室へ呼入れた。

『食滿はん、倅は何と云ふてまんね？マア一服おあがり』

よく故人と先代とが出てゐる話ではないか。

△故人の新居は整然としてゐた、さうして何處かからその『人格』と云つたやうなものが看出されるやうである。

△故人を偲ぶ唯一の思出はその新居を一度訪問する事である。

壺坂靈現記

嵓鼻に殘れる杖や冱え返る

羅生門

片腕の虚空に消ゆる朧かな

菅原車場

梅王の三本大刀や風光る

四ツ谷

腥き風に燃えたつ畝やり哉

貼りぬきの嵓の破れや秋の風

水刷毛の雫かゝりし夜寒かな

白粉の毒の惱みや身にぞしむ

實盛

魂こもる女の腕や村時雨

革足袋や亡父の型の當り藝

顔見世や凍てし舞臺の裏表

顔見世や顔にかゝりし紙の雪

辭世

去りて行く袂に秋の風悲し

佛壇の燈のまたゝきや秋の風

父母の聲聞こゆるや秋の風

逝きて尙囃となさん蟲時雨

歌舞伎座の樂屋で

阪東壽三郎丈にきく

右團次さんの話

（文責・源多生）

（右團次さんの事を何か書いて下さい――と依頼狀を出したら、會つていろ〳〵話すから、とお返事があつて、二十五日、わたくしは歌舞伎座の樂屋へ阪東壽三郎丈を訪ねた四時下りのことで、折から野球の放送が部屋の隅から小さく〳〵虫の聲のやうに聞えてゐた。）

――故人は役者らしくなかつたとでも云ふのですか、大變風變りなところがありました。樂屋で着てゐるこんなふだん着でもやれゆきが合ふの合はないのとやかましく言ひ、柄一つにしても、所謂派手なものは努めてさけて、澁く結城の上下か、おめしなんかでもグンとこまかいものしか着ませんでしたが、これなど、まづ目につく、あの人らしいところでせう。

――新らしく建てた豊中の家にも、アノ人の感じが出てゐます。あの敷地は百坪程で、立派といふよりは、アノ人一流に凝つたものといふ方がよいが、生前家の前の空地に、他の家が建つかもしれない、いや建つ危險性があるから、見晴らしを害されないうちにアレを買ひとらうと云ひ出し、未だ〳〵建てないだらうから――といふ皆の言葉を押し切つてついにそれを買收するとはじめてほつとしたと云ひ笑はせた事がありました。

――故人は六年程前、酒がもとで大病にかゝつてからは、酒は敵だと謹んでゐましたが、先年頃からまた少量づゝやづてゐました。故人の酒は、飲んで醉ふ可しといふ奴ではなく、酒と親しく遊んでゐる方だつた。色々なちよくなど集めて、二合の酒を二時間もかゝつてなめてゐましたがそれで全く樂しんでゐるんですね。故人は冬になると大變フグを好んで食ひました。以前大阪でフグの食へなかつた時代などは、ワザ〳〵フグに釣られて神戸まで出かけたものでした。下ノ關に行くとウンとフグが食へるといつて樂しみにして巡業する程でしたのに、フグのシーズンを待たずに逝つたのは故人も心殘りであるかも知れません。

――舞臺にみる故人の、晩年はまことに寂しいものがありました。しかし、舞臺に殘した話題は相當に賑やかだ。死後惡く云はれることの少ないのも故人の日頃の德で

最後の競演

林長三郎

高島家兄さんに付ては一入思慕深きもの有之昨年十月御園座改築披露に二人三番にて出演今にして思へば是が二人の共演の最後でした御父の傳統を繼き他の追隨を許さゞる特殊の藝術を持つ惜しき人を失ひました。人格上稀に見る圓滿高潔なお人でありし事を殊に痛感致します。（通信）

せうか。

――右團次、といへば、早替りが頭に來るが、若い時の、アノ人は相當新らしいものにも手をつけて、その氣慨をうたはれた事もあつた。しかし、早替りは何と云つてもお家藝だけあつて、何時演じても相當の人氣と信頼をあつめてゐるのは變な言分ながらさすがと感心してゐる。その早替りのことについてゞすが、誰がやつても、早替りでは、衣裳の着換へはすべて附いてゐる人々がやつてくれるので、本人は自分の衣裳換へは全く人まかせといつたのがよいので、生じつか手を出すと、二重に仕事することになつて面倒なのだが、故人はこの面倒を敢へてして、一々自分でそれを直さないと氣がすまなかつた。

――「鯉つかみ」で面白い話があります。例の本水のタンクの中へ飛び込むと、待つてましたとばかり、先から水にもぐつてゐたガタロ君が、それを授けて脫け口から引き出してくれるのがほんとうなのだが、ここでも故人の癖はとび出して、ガタロ君の手を借りずに自分でに水中を潛り泳いで仕事をするので、時々はガタロ君がうろたへて、故人を見失つてアトを泳いで行くといふ珍なゞめづらしくありませんでした。（語りつくせない程話題がありさうだが、そろ〳〵壽三郎さんの出も近づいて來たらしいのでペンをおさめにかゝる　隅にとりつけられたスピーカーから小きざみに木頭が響いてくる。打上日だとあるので、幾人もの人が、入り替り立ち替り、お目出度うを言ひにくるのが小忙しい

――故人がもうしばらく生きてゐたら、この連日の大入りに、同じ舞臺で一句あつたでせうに……。

（さう云へば故人は十月の歌舞伎座公演に出るべくやうなつてゐて、出ずに倒れたのだつた。だが大阪生粹の右團次丈、大阪勢のみでこの大入りをつゞけてゐる狀を泉下で知れば、莞爾たるであらう――とおもつた）。

讀者欄

八月號で御案内申し上げましたが、愛讀者の御寄稿を歡迎いたします。

一、締切は毎月二十日。

一、範圍は演劇、映畫、レヴュ一に關するもの。

一、一回四百字以内。（質實なものは特に長くても戴くことがあります）

一、宛名、大阪市南區久左衛門町八松竹ビル内「道頓堀編輯部」宛

一、但し原稿は一切返戻致しません。

一、誌上匿名は差支へありませんが原稿には住所姓名御明記のこと。

義太夫更新の途
文楽座よ進め
―今からでも遅くはない―

高谷伸

文楽座といふ言葉が現在では人形淨瑠璃と同意語のやうに用ひられ、事實上現代の義太夫節の權威者揃りの名手はこの殿堂に集められてゐる。また邦樂各派のうちこのやうな專門道場を持つものは義太夫節だけであり、義太夫の傳統を守る人々は自らその流派を邦樂の宗司と誇稱してゐる。

その文樂座が在來古典のみを上演してきたのが今年に至つて毎興行一二の新曲を加へてきたことは喜ぶべきことである。

明治末期から大正へかけて演劇時間が時代の風潮に押されて次第に短縮され歌舞伎に於て殆んど通し狂言の影をひそめた時にも猶文樂座はこの通し狂言を守つてゐたため演劇研究者なり愛好者の古典の通し狂言を求めるものは文樂座によつて辛うじてその渇を癒し演技者は通し狂言のところ〴〵に存在する竭場を演ずることによつて研究の段階としたものであつた。

しかし時勢の波はこゝにも押し寄せて時間上の制限と出演者各個の勢力とは狂言の配列をこゝもまた「みどり」に出すのを常とするやうになり文樂座は一つの特色を失つてをまつた。稀には忠臣藏なり菅原なりの通しがあつても今ではそれは例外に屬するものになつた。

狂言が「みどり」になつたといふことはその配列に於て歌舞伎や素人淨瑠璃と何等選ぶところがない上に、元來三段なり五段なりによつて完結しその一段の中に口、中、切がある。古曲をその秀れた場面三の切なり四の切なりを切り離して出すことは觀客に豫備智識がなければ筋さへ通らないことになり、その結果は萬人の周知する太十菅四すしや酒屋等の限られた作の反覆によつてやうやく理解の緒を求めるの外はないがこれすら解らない人がだんだん殖えてくる世の中である。

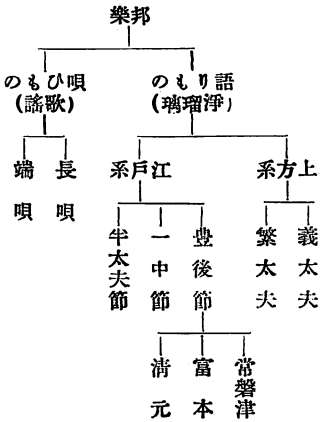
さうなればどうしても短時間でまとまるものを見せねばならない。ところが淨瑠璃に短篇物とか一段物とかいふものが殆んど用意されてゐないのである。そこで必要なのが新作の上演である。

新作を演ずることは如何な名作も度々の上演は御馳走による動脈硬化のやうなものでかなり心臓が強くても行き詰りの結果は生命に關するといふ危險を防ぐ清涼劑になるのだが淨瑠璃作者が近松以來名人相次いで輩出してゐるだけに新作の成績がとかく香ばしくなかつた。こゝに劇場側の危惧があつたことはよくわかる。しかし、今はそんなことを慮つてはゐられないまでに時代は移つて行つた。そこへ新義座一黨の脱退といふ爆彈もあつた。それで思ひだしたのでもあるまいが新作「爆彈三勇士」の大當りだつた。これは際物としての興味と曲節にも新味があつたからではあるが、とにかく當つたといふ記錄も見つかつた譯である。

そこで今年の三月以來大森彦七、連獅子、鞘當、かされ、東海美女傳、鈎女の六つの新曲ができ十一月には神崎東下りの新作が出るといふことである。

新作大いに結構であるがこれらの作の中に純創作の一つもないことは遺憾である。大森と鈎女は常磐津、かされは清元、連獅子は長唄、鞘當は歌舞伎からそれぞれ移植したもので甚だしきに至つては殆んど在來の節調の大部分を失敬してたゞ細を太にかへただけに近いものさへあつた。漸やく東海美女傳が長篇物の拔萃脚色で創作に近いものであつたといふばかりである。

これを説明する都合上邦樂の系統を圖示すると



大略右のやうになる。

その中で義太夫節が歴史も古く傑作が多かつたのでいつとなく義太夫が邦樂の宗司と自負するに至つたのである。ところが近來の新曲を見ると自ら末派と見下してゐる豐後系の淨瑠璃を移入し時には唄ひものをそのまゝ取り入れてゐるのは自らの誇りに對し自らそれを冒瀆するものである　如何に清元のかされが流行するといつても同じ材料の「埴生村」がこちらにあるのである。それほど他を尊むなればまづ自ら稱する邦樂の司といふ誇を棄てればならない。歌舞伎の床に出るとか出ないとかの問題よりこの方がよほど權威に關はることである。

それといふのも作曲者に文辭を見るの見識がなく他の作曲したものゝ中からあれが面白いこれがよいと手輕く移曲するの安易を盜むのと、淨瑠璃より人形の見た目の方が一班に理解され易いから見た目さへよくばに引きずられて行くのとの二つが理由からだと思ふ。

既に新曲といふ目標が立つた以上、僞裝の新曲を棄てゝ純新曲に赴かねばならない。純創作に限るとはいはない。近松以前の古典に溯るも四鶴に取材するも現代作家の作品によるもその孰れでもよい。現に昨年三月の「修禪寺物語」などは近來での藝術味のあるものだつた。場面はすこし淋しかつたがよくまとまつてゐたし、文樂ではないが「阿蘭陀船」も淨瑠璃になつてゐる。淨曲化し易いといつて岡本綺堂氏の作品に限らない。題材はいくらでもある。作者は最近の二作は大西利夫氏だが食滿南北氏もある。散文的な脚本程に作家はなくとも求めれば作家もある。

題材があり作家がある以上作曲者と上演者が既作曲の他派の作品のみ狙ふのは卑怯である。松竹でも鋭意文樂座の新生命のために苦心されてゐるさうであるから問題はいよいよ進まねばならない。文樂座の更生、發展、それは今からでも遲くはない。

道頓堀

河合武雄

此頃は少くとも一年に二回は大阪へ行く。大阪へ行けば一日に二回は道頓堀の邊りをあるく。樂屋入り時刻の道頓堀は、甍夜入れかはりの見物や、家路を急ぐサラリーマンの群が溢れて、雜踏そのもので氣も落付かぬが、役があがつてあるく道頓堀は、甍の塵埃もしづまり、灯も美しく、樂屋風呂に火照つた頰に川面から吹きあげる風も心持よい宿へ急がうともせず、其處此處をあるき廻り、ショーウインドをのぞいたり、お茶をのんだり、道頓堀特有の、宵ツ張りでなまめかしい風情を樂しむ。

大阪へ行くといふことは、此の道頓堀情緒に久振りの對面をすることで、いつてみれば想ふ人に逢ふやうな嬉しさを感じるのである。

が、扨て然し、昔を知つてゐる悲しさ、現在の道頓堀にわたしは心から溺れひたることが出來ないのである。といつて、それが口癖の、理由もなく昔がよかつたとわたしはいふのではない。

道頓堀の情緒を分析――も大袈裟ながら――すると、それは水と灯といひ得る。

水は確かに昔の方が美しかつた。なぞえになつた岸に柳の糸垂れて、その水を、近くの錢湯が汲みあげてゐた程に美しかつた。

灯も美しかつた。昔はもつと道頓堀に闇が殘されてゐたこのにぢむやうな闇の中に、引手茶屋の灯が、ほのかに浮いてみえた。灯かげの女も、男でさへ、忠兵衛ならずとも風情がないではなかつた。

今の道頓堀の水は、あれも水ではあらうが、ながめ樂しむ水ではない。面を背ける水鼻をつまんで通る水だ。

灯は、今のあのネオンサインは餘りにもギドツ過ぎる。餘りにも原色すぎる。夜といふものに對する人間のつゝしみがない。

が、それも、時の流れなら致し方もない。

來月は大阪へ行く、大阪の廿五日間、わたしは又昔をなつかしみつゝ、夜甍道頓堀をあるくのである。

幕の間

英太郎

明治座の九月興行の時である。私は十一月興行大阪歌舞伎座で上演する第一、二十六號の隧道、と第二の、人生の日かげ、へ出て、第三の狂言は休みで、第四の狂言の中頃から出るのであるから七時半より九時半まで間がある。小堀誠君も私と同じやうに九時半まで出ないので其間の丸二時間程は樂屋で畫を書いて居るのもたいくつでつまらないから小堀君と相談して、どうだい此の間二時間あまりを有

意義に使用よと先づ頭をつかつたのが講釋場だ、講談の席だ。寄席でなく純講釋の席がよからうと樂屋口を飛び出した二人の身なりが面白い。私はちゞみの千筋縞の浴衣竹仙染でも洗ひ晒寢衣に書生の兵子帶を締めて麻裏草履の無帽小堀は『人生の日かげ』の屑屋の衣裳其のまゝカイキンシヤツに古ヅボン下駄ばきで誰れかの海水帽をかむりたるは彼れ氏顏をかくすより頭の禿を氣にした爲、通りすがりの自動車を三本指で八丁堀まで飛乘り聞樂亭と云ふ昔からある講釋の定席の前まで來た九月と云へ共まだ夏の夜、子供が南京花火などパチ〳〵と遊んで居る。八丁堀あたりに震災前の氣分はまだ殘つて居る。寄席行燈に眞水、英昌、桃林、此の寄席行燈の字は芝居や角力の字と違つた一流の字だ。およそ現代とはかけ離れた江戸時代を思ひ浮べるなつかしい寄席行燈なのだ。木戸番の老人は陰氣なしめり氣の有る聲で、しやーあいー、下足札をカチ〳〵とたゝいた木戸十五錢二人で卅錢拂つてふと下足を見ると六七足のかなり小ぎたない下足がぶら下げてある。私は小堀君に又麻布ぢやないかと云つた。去年の冬麻布の講釋場一の亭へ二人で出かけた時、お客がパラ〳〵と十人位より居なかつた事がある。中へ這入て二度びつくり正面の高座ではかなり年寄の前座が何にやら讀んで居る。お客はたつた三人居るのだ。それも三人共寢て居る眠むつて居るのではない。六十餘りの仕事師らしい腕の手首まで文身の有る翁、今一人は近所の老人だらう。それと職人の風體、眞中の渡り道をまくらに煙草を吹かして居る皆三人共座布團を五六枚仕用て居る。つまり私等二人を合せて五人の客なのである。高座は眞水が變つて上つた。讀物は連夜、越後源七、である。眞水は五人の客しかも三人迄は寢ころがつて聞いて居るにもかゝはらず眞面目にぬかずとばさず演じて居る。私は其のあきらめに同情しながらやはり面合せては聞いて居られなかつた。それは氣の毒の樣な氣がするからだ。私等を俳優であるとは氣が付かなかつたと思ふが、藝術を冒瀆した話なのだ。寢ながら聞くと云ふ事は、しかし昔は講釋場と云へば畳席は畳寢に行く處となつて居たもので、イビキをかく人は『イビキがあるよ』と注意して知らせるぐらゐなもので一かうかまはなかつた。其の爲今でも年寄の定連はそんな事當然の事と思つて居るだらう。とにかく二時間程を讀んで居る內九時すぎる頃お客は全部で十三人になつた。眞水だけ聞て表に出た二人は顏を見合せた。小堀君曰く、君寢て居たのか？僕は椽側の柱にもたれて聞いて居た。夏

がれとは云ひながらあれでどうして興行をして行かなければならないかを疑ひたくなる今夜の上りは二圓二十五錢だよ、中錢は水揚だから立派な藝人が三人も出て一圓づゝにも當らない。僕は考へたよ？次の夜は神田須田町の小柳と云ふ定席へ二人で出かけた。此所は伯の切席で英昌、眞水桃林と四人看ばん此の夜の客十七名。時代はうつる、私は何とかしたいと一人でくやんだ。今夜で七日程續いた。

役者と給金

山田九洲男

もう大分昔の事になりますね。それは私が大阪で若手新派の女形として活躍をしてゐた可成り華かな時代のことです。何でも十月の末であつたと記憶してゐますが。そろ〳〵冬の仕度にも掛らねばなりませんし、何くれと金が入用な時で芝居がはねてからその月のお給金を懷中にした私はしつかり懷を押へ乍ら外へ出たのです。折柄活動のハネの時刻で歡樂街は溢れるやうな雜閙なのです。私は一寸した買物があつたので、ある店へ歩み寄らうとしました。すると俄かにうしろの方が騷がしくなつたのでひよいと振り向くと何だか環になつて何者かを取りかこんでゐるらしいのです。好奇心を唆られてそのうしろから覗き込むと美しい狂女がどこから逃げ出して來たのか髪をふりみだして踊るやうな手附をして狂つてゐるのです。私は參考のため一心に見つめてゐました『コラ〳〵』と巡査が人ごみを押しわけてやつて來る迄私は夢中になつて狂女の樣子を研究してゐたのです。そして狂女が保護されて去ると私は買物を思ひ出してさつきの店へ取つて返しその品物をひねくり廻した末それを買ふ事に極め値段を訊いて金を拂はうと、懷へ手を入れると、さあ大變大事の〳〵給金袋がないぢアありませんか、妙な顏をしてゐる店の者にわけを話してさつきの所へ驅け付けたが人ごみの中ではあるしとても見付かりません。仕方がないので買物は取り止め交番へ屆けようと思つた所がふと胸をついたのは當時の人氣評判には均り合はぬ乏しい給金のこと何しろ若い頃のことで比較的花やかな人氣はあつたのですが給金などはお話にならぬ少額なのでした。それを交番へ屆けるとひよつとして落した金は戻つてくるかも知れぬが山田九州男の月給がぱつと知れ渡つてしまふそのため今迄見得をはつてゐたのがメチャ〳〵になつてしまふかう考へると、とても屆出る勇氣が出ずたゞつくづくと少い給金を恨みさつきの狂女を恨むのみでした。勿論一月のお給金はとんでしまひたゞさへ苦しい所を又々借金の種をこしら

へてしまつて苦しんだ事でした、薄給の惱みとでも申しましようか若い頃のお恥しいお話しです。

恨めしい青切符

小堀　誠

新橋驛が汐留にあつた頃のことである。從つて私もまだはかない下廻りだつた時のことである。

確か伊井、河合一座だつたと思ふが、本郷座を打上げて大阪へ行くことになつた。東京を立つ日、私は客先きでひまどり、汐留にあつた新橋驛へ駈付けると、ガラン〳〵鐘は鳴つてゐるし、私が俥を下りるなり大戸がガラ〳〵と閉つた。『早く〳〵』私のところへ走り寄つて來たのは、よく本郷座の樂屋へ遊びに來たりして、顏馴染になつてゐた赤帽氏であつた。私は急いで荷物と十圓札一枚を渡した。何も彼も突差の間であつた。赤帽氏は切符を買つて來てくれ、釣錢を渡してくれた。私はハツと思つた。釣錢が恐ろしく尠いのである。オヤと思つて切符を見ると、何と青切符。アツと云ふひまもなく『それでいゝんでせう。確かに釣錢はありますね。さ、早くお乘んなさい』私は乘せられて、汽車は出た。早く青切符で旅がしたいと夢にみてゐたその二等車の座席で、私はホツと溜息をついたのである。十圓から三等の切符を買つた殘りが大阪での私の小使であつた。二等の切符では幾らも殘りはしなかつた。これで一月暮せるか知ら……。考へると恨めしい青切符である。『どうしたい、嫌に沈んでるぢやないか。別れがをしい顏だよ』ポンと肩を叩かれた。河合先生だつた。慰めるつもりで食堂車へ連れて行つて下すつたが、私はその晩と、明日の朝の腹工合を考へて、つめられるだけつめたことだつた……。

舞臺の蟲

柳　永二郎

劇場に暖房裝置が出來てからのことだらうと思ふが、舞臺に蚊が出て、しかもそれがお正月でも出て來るのだからやりきれない。ジツトして相手の話なぞ聞いてゐる役で、ブーンと飛んで來て鼻の頭などへ蚊がとまつて、チクツと刺した時なぞ、全くどうすることも出來ない。

もう何年になるか、松井須磨子の藝術座で、四國の丸龜へ行つた時のことだつた。夏の初めでもあつたが、これは全く物凄い蚊で、皆が舞臺で蚊に攻められて、チョツトでもヂツトして居てはすぐ刺される。だから出てくる役者が誰も彼も首を振つて蚊にとまられないようにして居たら、『なんや。首ふり芝居かいな』と言はれた事が有つた。

蠅にも困ることがある。悲劇のクライマックスで女形の鼻にとまる蠅なんて、かなり滑稽なものだ。旅興行の田舎では、蟬や金ぶんぶんなぞが飛んで來て、深刻な場面をぶちこわすこともある。

今月の東劇の『いたち』の舞臺は、東北のつぶれかゝつた農家の道具で、芝居は盆踊りを背景に農村の事件を深刻に見せたものだつたが、その道具の張物へ、道具の製作所でゞも附いて來たのだらう。蟋蟀が一匹ついて居て、靜かに啼くんだ。その鳴音は初日に發見したのだが、五日目頃から次第に聲が衰へて來て、とう〳〵八日目邊りから鳴かなくなつてしまつた。偶然、その張物にとまつて、その板の間にでも生きていたのだらうが、その芝居の舞臺面と、こんなに調和した哀れを描き出してるとは、その蟋蟀も知るまい。それが八日程にして死んだらしく、その鳴聲が聞えなくなつた淋しさは、全く身にしみるものがあつた。

舞臺の虫で、これ程、哀れ深いものを私はまだ他に知らない。

大阪の土

大矢市次郎

餘り强健でない私が大阪へ行くと不思議と健康を取戻して一ヶ月の興行を濟まして歸京する頃は體重がすくなくとも三キロ位は屹度ふえるものだ。養生の點から云つても大阪は私のよき靜養地とも云へよう。

此の間、と云つても二ヶ月程前の事だが帝劇のスクリーン（ベニスの舟唄）で水の都ベニスのバルカロレーの場面をみて日本で催される大阪の水都祭に懐しく思ひ出した。

華かな五彩のネオンを寫す道頓堀の流れに明るく炊をともした無數の屋形舟に新町や南地かの夜にも美しい、藝者や男女の青春をのせて一夜の祭を唄ひ踊る狂氣亂舞の歡樂の場面はベニスのバルカロレーにもまして東洋的な華かさと明朗さがある等と水都祭のあの夜の情景がゆくりなくも私の心に浮んだづけ、身體の束縛されてゐる私達は何時またあの夜の水都祭をみる事が出來るやら、

大阪から程近い吉野山、高野山たつたの山々が色彩どられた紅葉の秋を展りひろげられ感傷な詩人が涙を流して移りゆく四季のつれなさを歎き深い想ひにふける事である。

私は奈良の都の秋を知らない。朝廷時代の頃鹿も鳴いたであるう紅葉の奈良の都の秋をしみじみ味わってみたいものだ。

大文字の東山を背景にした古都京の街にも秋の空高く雲が流れてゐる事であらう。晴れた秋の一日を京の都に過すのも惡くはあるまい大阪の名物である文樂も是非觀たいと思つてゐる。甲子園での庭球や野球の試合が是非あつて欲しいと今から願つてゐる。東京でみられなかつたテニス王チルデンの妙技も雨でも降つて日のべにでもなればみられるかも知れない等と惡い了簡を持合して大阪の土を踏むわけだ。

捨ヤン

英柳章太郎

今はもう故人となつてしまつたけれど、大阪の小道具藤原の古参者で團栗のやうな感じの好々爺であつた。

もうふた昔になりませうか喜多村、秋月、福井、井上、小織と云ふ芝居で極中の餅搗に、梅忠が出たことがあつた。勿論ズブの下廻り時代の私は、仲店の惣出の一人となつて梅川の門出の幕切れに、提灯を持つて足元を(梅川の)照らす役。

毎日提灯に灯が入つて居ないのである。幕切れの田舎大盡の臺の物も朱塗りの蛸足が巾を取つて二十人近がく下手の『のれん』の陰に居る。邪魔になつてならない。

若い時分の氣短さから、小道具にそれを片附けるやうに云つてもそんな下廻りの言葉を聞き入れやう譯がない。

二三度たのんでも空うそぶいて居る、その捨ヤンの態度が無精に癪に障つていきなり、朱塗の蛸足を蹴り飛ばせた。

その間に下座の囃子に出をせかれて揚幕へ……

やがて何分かの後奈落の中で小道具の捨ヤンと自分は、あきらかな爭鬪意識をもつて反目しあつたのであつた。

『貴方も女形やないか、もつと優しゆう云ふたら分る話を、何んでわしとこの商買物に足をかけた!!』

『何回云つても聞かないから蹴つたのだ、提灯にも初日から灯が一度も入つて居ないから灯が一度も入つて居ない口で云つても分らない者には惡事で行くよりない』

仲人が入つて喧嘩は大いしたこともなく濟んだのだつた。

それが十幾年かの後、私が道頓堀で一座を作つた時の小道具係は偶然にもその捨ヤンなのであつたんです。

二人は手を取つて笑ひました。

『君は小道具の主任に、私は一座を持つた、あの時の話を最う一度君にしたい』

『わしもズボラやつたんですまんことしました』

大阪の芝居の人達も世話に可成なつたが『捨やん』は特に私の小道具には氣をつけて呉れたものでした。

下積時代の友達は、なつかしいものですのに『捨やん』はその後亡くなつて何年にかなります。

七回忌ぐらひになるのでせう。

大阪へ行つて小道具方の人達を見ると、その『捨やん』の團栗のやうな姿が眼に浮びます。

(十月十八日)

續 宮本武藏の脚色を終へて

瀨川春郎

何に依らず一つの仕事をまとめるのにはそれ相應の苦心の要るのは當然の事なのだから殊更に苦心談なぞと勿體らしく泣事を並べるでもなく、既に料理鹽梅はお客の箸にかゝらうとして居るのに今更言ひ譯めいた事を云ては野暮の骨頂、薄つぺらなお丹珍と云はれるから成る可くはノホホンと濟まして居たいのだけれど、どうでも書けとお言附のまゝ些と斗り愚痴つて見る事にいたします。今度の「續宮本武藏」を御覽に成た御見物は屹度面白いと絶讃の夢を吝しまぬだらうと想像する程左樣に私の心臟は強い、だが然し、小說宮本武藏の愛讀者は些と斗り苦手である、此のお方々は必ず新麼事を云ふだらう、又八の筋が些とも無いでは無いか……宮本武藏の修行過程と、又八の歩む道、お通朱實の若い二女性の過ぎ行く道程、此の兩者を併せて始めて此の小說の興味は深いものをと……勿論私もふんだんに俳優を使て時間にしては五六時間、場數にしては二十場餘りも演て見度とは思たのである、凡そ連載中の小說を脚色するのに掲載部分を追越して大詰をつける場合と、既に掲載された小說中の一部分丈けを一つの狂言に纏める場合と二つの方法がある、前回の地の卷は其の後の法に從ひ前後二時間で無理の無い脚本をして居る。だから今度は長時間を費しては成らぬと云ふ格別法則がある譯では無いが——

其處はまた商賣質氣と云ふ奴が腹の底で種々な文句をつけ、何でも前回と同じ丁數で結末をつけさせようとする。其處に無理が生じて來る。元來小說の脚色と來ると多くの場合どうも筋を運ぶのに急な爲めに內容を稀薄にしてしまふ事がある。此の陷り易い泥濘へ踏み込むまいと愼重に警戒して取りかゝつたのだが、ふりかえつて見ると仍但足元は泥だらけなのである、一體長篇物を、前後篇と分けて脚色する場合、前篇が非常に骨の折れた時は後篇に成ると至極樂に成り、其の反比例に前篇の樂なものは後篇に至つて迚も困難が加重せられるものである。何故かと云ふと、前篇で充分擴げられたものは進むに連れて次第に枝葉が縮少整理され其の主要部分丈けが殘つて行くからで、又其の出發點が比較的單一なものは進むに連れて複雜を加えて行くのが殆んど通り相場と云てよからう。武藏劇前篇の地の卷は、關ヶ原から杭瀨川のお甲の家に救ひを求めた又八と武藏、之れがお甲母娘と又八の三人は其處を去て、武藏が獨りぼつちに成り、故郷に歸る途中國境ひの大木戸を越えた罪科で藩吏に追はれ、山に逃込んで鬼熊式の狂暴性をあらはす、それを澤庵が捉えそして禪學的に訓戒を與え姫路城內の不開の間に閉じ籠め、此處で心の眼を開いて名も宮本武藏と新しい呼名に成て修行の旅に出て行く、と斯う書た丈けでもう立派な脚本に成て

居る、だからこそ左したる無理もしないで相當内容に觸れた表現も出來たのであつた、扨て其の續篇である今度の水の卷と成ると、前篇が生み落した劍士の玉子を、云はゞ赤ン坊の武藏を、やがては日本一の兵學者とまで育てゝ行かなければ成らない重要な部分なのである。

原作者も此處に重點を置て居るらしく察せられるし、讀者も其處に興味と關心を寄せて居る事は明らかだ、故に水の卷に於ける武藏の、吉岡道場に於ける試合も寶藏院に於ての勝負も正しく重要性があるのだが、舞臺に上すと成ると一應考へざるを得なかつた。

何故なれば、小說でこそ作者の巧みな筆先から迸る殺氣に讀者を包んで魅了しつくして居るけれど、舞臺で甲乙の俳優が水劍とたんぼ槍で立廻る場合、果してどれ程の殺氣を溢らせ得るかと云ふ點である、小說では立合ふ双方決死とある、舞臺の試合は木刀で決死とは觀客に受け取り切れない、其處に小說と芝居の相違點を發見する、だが武藏劇を演じる以上、如何にして武藏が伸び行くか、原作者が重點を置て居る處を表現しなければ成らぬ筈であるが、結局脚色途上から見るとそれ等は一つの「過程」と成る、若しそれが「過程即結果」と轉ずる事のある可き過程であつたら、必ず地の卷同樣、無理なき脚色として些か得意にも成れるのだつたが、武藏が修行途上の心境は到底脚色は至難だと遂に匙を投げざるを得無く成たものである。

だが私は尙得意で、柳生城中の心陰堂を取り上げて見た、その爲めには前に宿屋と街道を加え、尙其の次には山莊を加え、原作のまゝは上演して見度と工風をしたのだが、此れが殺活の鍵を握る者は怪少年の城太郎で、一體誰れが此の役を引受けるか、子役には無理な、と云て大人では仁輪加に成りさうな此の一ト後、若し失敗したら……と成ると次第に不安な影がさして之れも結局出來ない、芝居と云ふものゝ六ケ敷さ、とつくゞ嘆じて頭を抱えた事であつた、どうかして踏み込むまいと努めた泥濘は、今は自ら飛び込む事に成た。勇敢に亂暴に……そして担れあげた二幕五場は、百幾十四の分量を一と握りにして突き交ぜた變形、とは云え原作に背いたのでは無い。

柳生谷も清水も、分解して其の重要部分を盛り上げたまでの事で、凡そ此の小說を讀んだ人なら、物足らぬとは云え全面的に味はつて貰えるつもりであるし、又全然小說も前回の地の卷を御覽に成らないお方と雖も、獨立した一つの芝居として面白く見て貰える事と信じて居る。

前回と比較して御料理の味こそ變つたが、寧ろ大衆的で見た眼には却て今度の方が面白いと思ふ、只迷惑なのは原作者と相談した場面の半分が實現出來なく成つた一事である、だが然し、來る可き完結篇には愈々相手の佐々木岸柳をもひき出し、又八とも再會させ、原作者は素より大方の讀者にも滿足して貰えるやうな、立派な一篇に仕上げやうと思て居る、どうか期してお待ち下さい。

道頓堀

値下斷行

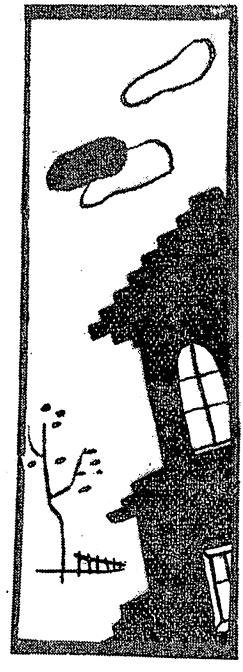
二十錢

（一年—二圓二十錢）

名人廣助師に

話たせ見を畫映

伊井志寛



文樂座の下廻りが映畫俳優の下廻りになつた同じ下廻りだが隨分かけはなれた轉向である。誠に色ぼくないお話だがあんまり下つ腹へ力を入れ過ぎて脫腸になり、醫師の注意もあつたので遂に太夫商賣を思ひ止つた次第だが、今にして思へば脫腸になつたのがよかつたのかも知れない。

然しその津太夫師のもとにゐた四年間の文樂座の修業生活、修業は今日の私にどれほど役立つてゐるか、すべて血となり肉となつてゐることは事實だ、その文樂座の大序時代、つまり虫眼鏡で見なければ讀めない字の時分に新人會と言ふ文樂にはふさはしくない集ひがあつた、會員は今日文樂をとび出してゐる、つばめ太夫、猿太郎、清太夫、猿二郎と當時津駒太夫と言つた私の五人であつた、これが毎月一回新町のあるさゝやかなお茶屋に集つて思ふ存分なことを言ひ合つた、つまり文樂座の將來、自分達の一生の仕事である義太夫といふものに對する忌憚なき意見の交換會であつた。

猿二郎の意見は斯ふである、義太夫と云ふものを、もつと大衆的にひろめなくてはいけない、その手段として、洋樂などとの合奏なども盛にやり、童謠、新舞踊などにも大いに利用し又一方時局問題を新作して次々に發表し大衆に呼びかけなければ駄目だと云ふのである。次につばめ太夫はあくまで傳統を尊重し、師匠の藝術、教へを遵奉するべきだと、となへた。清太夫は、理屈ぬきの悲觀論で義太夫などは駄目だ文樂の餘命も幾許もあるまい、だから義太夫と云ふものは唯、旦那衆の道樂として殘るのみで、本場の修業などと云ふものは立行かなくなるにきまつてゐる、だが三味線ひきは稽古屋として生活は出來ても太夫は駄目だ今のうちに轉業すべしと言ふのである。

事實私達もそんな氣はしないでもなかつたが、私は清太夫ほど悲觀視してはゐなかつた。

私の主張は斯ふであつた。義太夫イヤ文樂座の諸式は、あくまで古式でや

るべきだ、つまり昔のまゝの姿でやつてほしい、早い話しが太夫も三味線ひきも又人形使ひもチョンマゲをつけ、燭臺も電氣など一切使はず、昔ながらのローソクを使ひ、舞臺照明も一切カンテラがなにか知らないが昔の物を使ひ、世の中が如何に進もふが、文樂の中だけは釋然として昔のまゝでゐることこそ文樂を持續する唯一の道である猿太郎もこれと同意見であつたと思ふそしてそれが毎月一回必ず集り同じやうなことを論議して結果は皆屁になり、たはいなく雜魚寢してしまふのが例であつた。

それから二十年近く經つた。

私は蒲田から帝キネ、新劇協會を經て今日に至つた。清太夫は私がやめると間もなく東上して當時帝劇にゐた故守田勘彌の門に入り、澤村喜昇と名乘つて久しく草履をつかむでゐたが、後故郷の尾之道へ歸り親の殘した料理屋營業をやつてゐる。

猿太郎は一時家庭の事情で姿を消し友達を心配させたがその後舞戻る、トタンに友次郎師の前名鶴澤猿糸と改名し、晴の東京では、師の三味線をひかしてもらつてゐたが、同志つばめと手をたづさへ新義座を組織して文樂をとび出し南部、勝平の諸氏と信ずる道のために精進してゐる、やがて彼等の天下になるであらふことを信じてゐる。

猿二郎は當時からの理想通りカチ〳〵山を童話劇にして發表したり、高山彦九郎を新作節付けして公會堂で演つたりしてゐたが、この頃の動靜を知らない、この文樂切つての新人猿二郎のお父さんが攝津大掾の相三味線、古い方での第一人者、名人豊澤廣助師なのだから面白い對照である。大正何年頃であつたか、廣助師が浪花絃阿彌となるにつき、その名披露目のため七十何歳かの老軀をひつさげて新富座へ來られたことがある、當時私は蒲田の大部屋に奈良眞養、岡田宗太郎、小林十九二などの諸君とゴロ〳〵して居たのだが一日なつかしさのあまり築地の六方舘へお尋ねした、その時の話しである、猿二郎が『實は親父は生れてからまだ活動寫眞を見た事がない、連れて行くと言つてもなか〳〵動く人ではなし、なんとか見せる工夫はないか』と云ふのである。合點だといふので、撮影所の倉庫から二卷物の喜劇と影寫機を借り出して出かけて行つた。壁にシーツをはつて急ごしらへのスクリン、急ごしらへの技手だ。タイトルが終つて畫が出ると、廣助師はまるで子供の樣に大きな聲で『ア動きよる、動きよる』とうれしさうに言はれた。

しばらくすると私が學生になつて一寸顏を出してゐる場面があつた、猿二郎が『おとうさんあれ津駒やんだつせ』と敎へると『フム津駒ハンか、ほん

まに津駒ハンやな、フム偉いもんやなア』と感嘆された、何が偉いのか解らなかつたが、ハンドルを廻しながら一寸テレたものである。六十何年三味線以外の何物にも興味の持てなかつたこの老人に動く寫眞がどんな感銘を與へたか？。

名人絃阿彌逝く、といふ新聞の出たのはそれから間もないことであつた。

私は師に映畫を見せたことが、なにか大變いゝ事をしたやうで嬉しかつたあの畫が映つたとたん『動く、動く』と子供のやうに喜ばれた、師の姿を思ひ浮べると、今だに微笑ますには居られないのである。

わたしの亀さん

若葉蘭子

思はず吹き出した話、さア何んでしたか知らモシ〳〵亀よ亀さんよと歌にある其の亀さんの事ですが亀さんのお話は昔からいろ〳〵と澤山に有りますし聞きもしました。浦島太郎が亀に乘り龍宮に行つたお話はどなたでも知つてゐます、私もきつと其の亀さんがいつかいひ所に連れて行きませうとお迎いに來る樣な氣がしますのそれは私が十六七歳の頃初めてお芝居に入つて東京の公園劇場に出た時です、お芝居の中はいろ〳〵珍しい事や面白い事が澤山に有つて初めての私は毎日〳〵劇場に行くのが樂しみで嬉しくつてたまらなかつたのです、或る日樂屋の裏木戸のおぢさんがサア若葉さんいゝものを上げませうと云つて亀さんを一疋呉れたのです、私はそれまで別に亀さんを好きでもきらいでもなかつたのですが其の亀さんを樂屋に持つて行き疊の上に置いてやるとすぐ首や手足をニューと出して、さも嬉しそうに部屋中をのそ〳〵と歩き廻りしまいに私のふとんの上に上つてさも安心したかの樣にちつとして居るのですなんだかかわいくなり家に歸る時も樂屋に行く時も私の手のつゝみの中には此の亀さんがいつも入つてゐますの、ところが四五日たつて心配な事が出來ました。それは亀さんが何んにも御飯を喰べないの、こんなに何んにも喰べないで大丈夫か知ら、家に歸つた時臺所の流し場へ、御飯粒をやつても朝見ると少しも喰べてゐないので私の行くまでぢつと待つて居るのですもの。どうしたらいゝのか知ら、亀さんはきつと自分の本當のお家の有る水の中に歸り度いのだよ、早くどこか逃がしておやりと母が云ひますので私は亀さんと別れるのがとてもいやで淋しいなアと思ひましたがこのまゝでは死んでしまふかも知れない、と思いきつて、母と二人で忘れもしません淺草公園の瓢簞池の中に放してやりました。亀さんはさも嬉しそうに暖い日の光をあびながらお池の中を泳ぎ廻り、やがて水の中にさようならとも云はず入つてしまいました母と二人しばらく水の面を見つめてゐました、亀さんはね、こんなに大切にしてもらい今自分の好きな所に放してもらつたのだからきつとお禮に出て來ますよと母が云ふのからなほ見てゐますとね、なんだかお池の水が波立つたかと思ふと黑い頭がぽかんと出て私達の方へ泳いで來ますそして石の所に兩手をかけ首を上げ三べん見まわしびよこん〳〵と頭を下げそのまゝ元來た方へもぐつて行きました。その恰好が實になんとも云へない面白いと云ふのかおかしいと云ふのか思はず母と顏を見合せてぷうと吹き出しました。笑つてはゐましたが私の目には涙がきつと光つてゐた事です、それから何年か今でも無事に大きくなつてゐて呉れるか私はお池をみたりするときつと思ひ出します私がおばあさんになつたらその亀さんがお迎いに來てきつと面白いゝ所へ連れて行つてくれるでせう。

ドーナッポ・ポンポン

珍々
歌舞伎
大槻
山崎街道
縞の財布の逆戻り
克橋忠弥
アレく城が見えぬ
先陣館
射った間者は鉄カブト!!
寺子屋
松王丸春藤
玄蕃は入社採用試験の審査官か…

漫画レビュー
つもた
先代萩
無念残念
ひたいの傷
大徳寺
坊には猿面のおぢちゃんがついてるヨーッ
壺坂
沢市夫婦その後の商賣？
眼病一切壺坂屋
二十四孝
此度入選させますワ
かつもり安
すごい景気だネ
三千両
ナーニバットの値上りサ
鮓屋
スポーツ熱にうかされた椎太郎、流石!!

女優さんの楽屋訪問

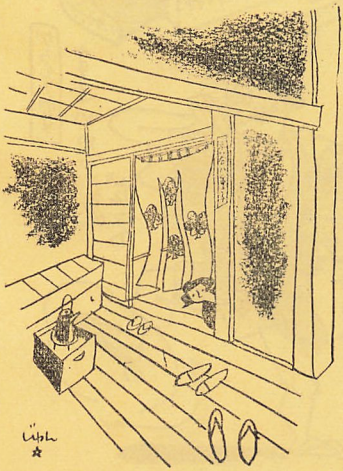
十月の中座で

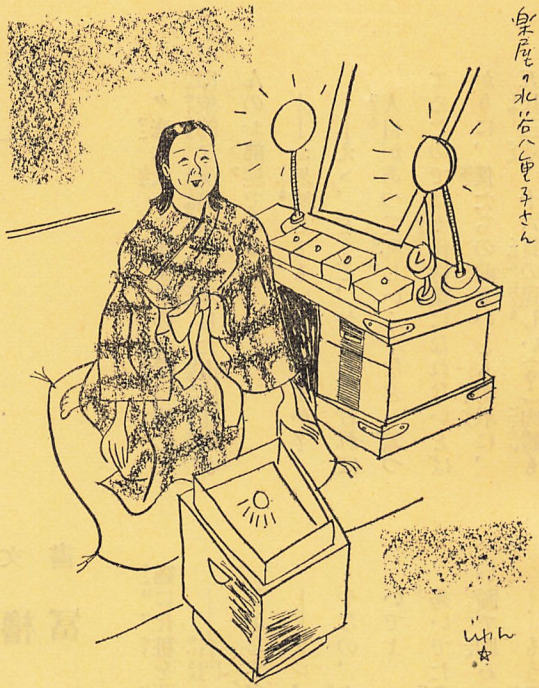
煙にまかれた勘彌問答

水谷八重子さんの巻

（畫と文）　辰井じゅん

ガラリとドアーをあけて、チュウインガムを噛りながら「どう、當時クラークゲーブルへのお熱は」なんて怒鳴りながら、れそべつて一問一答の交せるレヴュウの樂屋とは事代り、此處は當代女優のナムバーワン、水谷八重子さんの樂屋であるから格式がある。先づおそるおそる廊下に坐つて「先生はお暇でいらせられましようか」と、控室のお弟子さんにお仰ひを立てる。やがて「只今御入浴中なれば暫しそれにてお待ち候へ」と御返事がある。うす暗い中座の樂屋、煤けた壁、磨かれた柱に水谷八重子のはり紙があり、廊下の隅つ子で、火鉢にのつかつた茶瓶がシュン〳〵と鳴つてゐる。これは來客に出すお茶、さてこの樂屋を襲つた一行、漫畫家富田英三、辰井じゅん、漫文家櫓万平、千塚榮のうるさ型鬼梅の定紋うつたるノレンから、うさん臭い奴とばかりに、可愛いゝおかつぱのお弟子さんがチラ〳〵とこちらを覗く、やがて待つ程に細い階段を登つて、水谷八重子さんが現はれました「どうもお待たせしました」ブーンとお風呂の香がたゞよつて、いゝ氣持「それでは何卒」と控室を通つて通されたお部屋は十疊敷、その間中にドカリと水谷さんが鏡の前に坐つてゐる。鏡臺に取付けられた電氣スタンドから、合計六十ワットの光りが投寫されて、風呂上りの水谷さんのお顏をおびんするの樣にテカ〳〵と照して神々しいばかり、お召になつてゐる樂屋着は黑の格子縞のネル場末の女給さん等が寢間着に着てゐると見ち





んなものお書きになつては、あれはネ、おなかに廻くもの」新道の朱實のセリフの様な甘い名調子「ちや、あの丸いものオツパイ」「アラあれは、ストツキングですの、あゝしとくとはき易いでしよう。お乳はそこん處の赤いおフトン、中に小豆が入つてますの、綿だと脹らむだけで、こう、たつぷりとしないでしよ」

や居れん代物ですが、さすが、そこは水谷さん、品があつて、上品で「ネルがお好きですか」先づ質問の第一陣「えゝ、あたくしおセルよりおネルの方が好きですの」丁寧な物の云ひ方である。一同質問戰の矢がにぶる。

はるか壁の處に、白いフトンの様なものに紐がついた危しげなものがブラ下つてゐる。早速スケツチにかゝると「アラ嫌ですワ、あ

お手玉を大きくした様な紅絹のフトンが二ツチンと違ひ棚に乘つかつてゐる「水谷さん、ファンレター凄いのありませんか」「あたくしのお芝居は皆様家庭的に御覽下さるので、女學生の方が一番多う御座います。その點レヴユウのファン層に近いですネ」「レヴユウは御覽になりますか、誰がごひいき」。「別に誰つて事はありませんけど、皆様お友達で

すの」「男裝の麗人などお演りになりたかありませんか」「男役は樂しいですネ、お芝居ぢや女役は藝三分手前で止めるつて捉てがあるのに比べて、男役だと藝一ぱいに表現することが出來ますから、その點ノビ〳〵としますワネ、ハムレットなど」「映畫は如何」「餘り撮りたかありません、それにあたくし身體が大きすぎるので映畫には向かないですの」「何尺」「五尺三寸」「映畫の兄いもうと、東京ぢや、水谷さんのお芝居の方が先だつたんでしよう」「えゝ、あれは全然私の型で、お芝居にも版權があれば、苦心した型は護れるし、隨分お金儲けが出來ると思ひますワ」「將來のプランは」「種々あるんですけど、言つちやふと、すぐ先にやられちやふのでネ」伸々要心堅固です「中間演劇がやかましいですが一つ御說明を」「舊劇を昔のまゝの型で見せるんぢやなく、現代の皆様にも理解していたゞける様、種々工夫して行く、つまり歌舞伎の古い型を咀嚼して新しく見せる中間演劇といふ事になるんだと思ひます」「井

上先生とは隨分長いですネ」「えゝ、始めは小役をさせていたゞいてたのが、娘役、戀人この頃ぢや奥様までやらせていたゞきます」「先程から專ら機をねらつていたんですが一つ度胸を決めて申します。勘彌さんとの結婚話は如何です」一同首を三寸三分程前へつん伸ばす。水谷さん顏色一つ變へないで、いともシャア〳〵と「なんですか皆様そう仰言つて下さいますが」と他人の事の様に微笑んでゐる。はてどう解釋するのか、一同煙にまかれて、わかつた様な、わからん様な顏と顏を見合した事でした。

Kの字にしてやられる話

市川紅梅さんの巻

文　櫓　萬　平
畫　冨　田　英　三

—B—

〃彦六大いに笑ふ〃の女給に扮して印象的な演出ぶりを示した市川紅梅さんのお部屋である。

——お邪魔してもいゝんですか？

——えゝ、どうぞ、かまわなければ人目があつて恥しい……などゝ云つてゐたのでは女優稼業になれないとばかりに、僕たちの前でいとも勇敢に、五尺三寸、十六貫の逞しい(?)肉體も露に化粧を落するのである。

——名門に生れた幸福……つて奴をきかして呉れんですか？

——ソレ、きかれるのが、イツチ、やなの、名門だなんて言葉、云はないでよ

秀いでた鼻梁の上端に輝く、さとしい瞳で睨みつける、話題の轉廻だ。

——もう歌舞伎の方へは出ないんですか？

——さアどうだか。あたしにはしつくり來るんですもの、ダイチ、やり甲斐があるんぢやないの、歌舞伎の象徴的——より、新劇の寫實的——でも先生(六代目)に教へて頂いた歌舞伎の精神……つてものは有難いと思つてんのよ

彼女は名にし負ふ團十郎の孫娘、いはゞ十一代目團十郎なのだ、新劇に生きたいらしい紅梅さんの何處かに傳統的な香りが感じられるのは僕ひとりであらうか！

——あたし、鏡花さんのものがやり

その道の先驅者に戀愛道を訊く

岡田嘉子さんの巻

文　千塚榮
畫　辰井じゅん

たいの、明治中期のあの蒼白い青黛のやうなロマンチシズム、美しい臺辭……たまらないのよ、今の若い作家ぢや岡田禎子さんのものがいゝわね、あの方の〝愛痴〟はあたしたちの演劇グループでやりましたけど——ところでね、一つあなたのアノ方面の話をきかしてほしいんですが

——あたしの彼氏はKの字よ

と、鏡臺を並べてお化粧中の菊池寛が日本一の美人と推奬する竹久千惠子さんがクスンと笑ふ。

——えゝとKですね、わからんな

——電話帳でKの頭文字んとこ探せばいゝぢやないの

OK！十一代目は相當なものである

最後にドヤ〳〵と踏込んだのは岡田嘉子さんと竹内京子さん御姉妹のお部屋

「ごめんなさい。こんないゝ恰好をして」

せつせとお化粧をする岡田さん、一同餘り近くに坐りすぎて恥しいみたいです。

「お出掛けですか」

「えゝお客樣の御招待で、チョイトおコーヒ四ツ云つて來て頂戴、それからそこのお菓子も」

仲〻サーヴイスがよろしい。全然嬉しくなつちやふ

「大阪は如何です」

「何となく懐しいですネ」

「思へば竹内さんと赤い灯青い灯をやられたのも道頓堀ですからネ」

「オヤ〳〵早速それですか、今日此の頃は食氣の方に專らかゝつてますのヨ、大阪が好きなのはお肉が美味しいから、油つこいものが好きでネ」

「ホルモン過剰になりますヨ」

「お婆さんだから少し位過剰にならなくつちやホ、ゝそうでしよ」

辛抱出來んです、話してる間にメイキャップがどん〳〵進んでこの邊りルーヂュをひいてチラリとあの惱ましい流し目、スケッチをしてたじゅんちやんすつかりあきれてしまふ

「實は今晩、その道の先驅者である岡田さんに戀愛道を教へてもらほうつてんでハリ切つてるんですヨ」

「オヤ〳〵こんなに綺麗な青年達を前に於て、そんなお話なんかテレちやつて」

「どう致しましてへ、、、」

これ〳〵で嬉んゐる場合ではない、

「先づ良ちやんとの此の頃は」

「竹内ですか互に好きな事して遊でます」

「と云ふと別居なんですか」

「と云ふわけでもないんですがお互の私生活には干渉しないつて事にしてますの」

「これは又道行までなさつた御兩人が」

結局プラトニツクラヴなどは熱病の如きものなり、當時は若氣の至りでオネツを上げたまでつて事に相成り候

「ぢや結婚は結婚戀愛は戀愛とはつきり區別する丹羽文雄式に御賛成ですか」

「何だかとてもサバ〳〵して、いゝぢやありませんか、此の頃の娘さん達の方が利巧ですネ、若い人達はうらやましいと思ひますワ」スーツとまゆげを描いて、また流し目、あちやらの方では當の竹内良一さんの妹さん、TSSKから轉向した京子さんがニヤ〳〵笑つてる、全然可愛いゝ坊ちやん扱にされた一同それでもいゝ氣になつてこんな姉ちやんに可愛がつてほしいナと無邪氣な溜息をつく。

見合ひ

芋平

「れェ、あした梨山様からお電話でネ、明日は日柄もおよろしゆ御座いますから是非先日御話申上げました凹野様の御令息との御見合をツてネ…」

「ねェ、あした、なんとか御返事をして下さらなきゃ…あの子はあなたとあたくしとの娘ですよッ」

「れェ、どうしてあの子は世間様の娘の様に脊丈けが延びないんで御座いませう?…だつて、あの子が外出をしますと近所のネ、ほらあの汚い長屋の貧乏人たちがワイ〳〵出ましてれ(ネェ延びてちようだいナア!)なんて…なんてブジョクするんで!」

「れェ、あなた、凹野様の御令息はK大のラグビーのキャプテンで御座いますツて…お身丈けがあなた六尺八寸ですつてさ…」

「れェ、あなたツたら、あの子は三尺八寸ですかられェ…」

「…れェ、どうしませうッ、見合ひは明日ですよッ、あゝ一夜のうちに、あの子が延びる方法が…方法が…」

「れェ、あなたは一體あたくしの話してゐるのを聞いてるんですかッ!あなたッ!」

「お寫眞を先方様ぢや御覽になつてお惚れこみになつたんですつて…れェ、あの子の寫眞はいつも顔だけの大寫しですかられェ」

「あゝ神さま、どうしてあんなに、うちの娘は丈けが低いのですッ!」

「れェ、れェ、あなたッ!どうしませう〳〵、先方様ぢや外苑で午前十一時とまで御約束になつて來てるんですよッ」

「いつそ宅で座つたきりの娘を見てもらいませうか?それで先方が後から、娘の背の低いことを云つて來たら足りない寸法だけの持參金を積みますワツてのはどう、…これだけ考へても名案が出ないなんて、あなたももう駄目れ!うちのあの娘が可愛くはないんですかッ!!」

「どうも…因つとる…いやお前よりもこのパパが困つとる…出來るなら頭と脚を引延しても…と思ふくらいぢやよ…アッ!名案があるゾッ!!」

「えッ?名案?ど、ど、どういふ?」

「心配はいらん…うちのダツトサンにあれを乘せて行きゃ…娘は普通に見えるよ」

演劇飛行便

★東京から
★大阪から

●東京便り●

▼歌舞伎座――稀代の名優三世中村歌右衛門建碑記念興行は當代のあらゆる名優を總動員し、三世に因む名狂言數種を絶對配役にて上演する。我歌舞伎劇の精華こゝに結晶して燦然眼を奪ふ。まさに最高至上の大芝居といつて過言ではない。

出演俳優は歌右衛門、羽左衛門、宗十郎、仁左衛門、三津五郎、友右衛門、三升、幸四郎等に菊五郎、吉右衛門、左團次が夫々一座を卒ひての合同、更に大阪から梅玉、魁車その他が參加する。狂言はすべて三世歌右衛門の極付とされたるものから嚴選

第一「一谷嫩軍記」一幕、第二高安月郊氏作「關ヶ原」の一節、第三「口上」第四「双面水照月」(常磐津松尾太夫社中)第五岡鬼太郎改修「嚴島招繪扇」第六「繪本太功記」一幕、第七「其小唄夢廓」(清元延壽太夫社中)第八「猿廻出諷」一幕、第九「芝翫奴」――(一日初日、三時開演)

▼東京劇場――左團次、松蔦、訥子、莚升、芝鶴、左升、荒次郎、源之助、市藏等に猿之助、八百藏、段四郎、勝太郎、源十郎等、是に二年振りで延若が莚女と共に參加、更に多賀之亟、權十郎も加入する堅陣である。狂言は新舊名作のみを揃へたもので――

第一「碁盤太平記」第二今村紳一郎氏作「月ヶ城」(新作募集入選作品)、第三木村富子氏作「高野物狂」(杵屋佐吉連中)、第四「長崎土産唐人話」二幕、第五長谷川伸氏作「三代目親分」四場、總じて新舊名作陣といつたところか(一日初日、四時開演)

▼明治座――十月道頓堀中座で好成績をあげた水谷、井上らの新派合同劇は十一月は明治

ピスーカー

★十月九日より十一日間、久々の東京大相撲とあつて大入り滿員正に札止めの大盛況を呈したが勸進元の松竹興行では「なアにもうかりませんよ、元々國技なんてものでもうける了見なんかけち臭い。他に大きな使命が自づからある可き筈です」とさすが大きく出たが、土俵の四本柱の穴の大きさから當つて先づは少なくて三四万、ひよつとするとひよつとろすぞと指一本を突

座公演、出し物は四種共こと〳〵く新作――

第一龜屋原德氏作、金子洋文氏舞臺監督「生ける生母」三幕、第二八木隆一郎氏作「熊の唄」二幕（助六大いに笑ふの演出者杉本良吉氏が監督）第三本庄桂輔氏作、巖谷三一氏監督「當世女大學」三場、第四片岡鐵兵氏作「朱と緣」を村山知義氏が脚色並に監督する三幕もの（一日初日四時開演）

▼第一劇場――澤田正二郎追善興行を以つて關西を一巡して來た新國劇は十一月歸演――

第一眞山青果氏作「國定忠次」二幕四場、第二新國劇獨蔘湯の稱ある長谷川伸氏作「掏摸の家」一幕五場、第三行友李風氏新作「風雪地獄双紙」二幕四場（一日初日）

●大阪便り●

▼大阪歌舞技座――十月物凄い大入りを續けた同座では、この月も絶對大入りをとるのだと頑張つてゐる。

主なる出勤者は喜多村、伊志井、南、若井、花山、成島、白河、雪岡、菊波、英に藤村、河合兄弟、高梨、下田、藤田、成田、西脇、武村、村田、河合更に花柳、瀬戸、吉永、花和、渡邊、藤井、松下、小堀（彰）花柳（喜）柳に大矢、紅梅、はる子、公乃、千代枝、吉岡、若宮、川島、大東、山田、小堀等で――

第一巖谷三一氏作、「廿六號隧道」二幕、第二川口松太郎氏作「人生の日かげ」五場、第三瀬戸英一氏作花柳巷談「讀々二筋道」一幕、第三川口松太郎氏作「風流深川唄」三幕（一日初日で四時開演）

▼中座――豪華絢爛を競ふ花街の溫習會は毎年日頃の研磨を茲にとばかり秋の大阪に濃淡を添へてゐるが、こゝ南地五花街十一年度の大溫習會は二日より十三日迄前回同樣中座で開演された。名妓の所作事とタイトルするだけに、その舞臺は演劇に接近するもの多く出演妓一同の眞摯さは涙ぐましい程の精進ぶりだとある。

更に、このあと十八日からは家庭劇が歸演することに決つてゐる。

▼浪花座――九月浪花座で宮本武藏その他でき出して大木戸雀のうるさひさえづり。

✕ブラジル經濟使節團長サガード氏夫妻をはじめ一行三十餘名は十月六日夜文樂座人形淨瑠璃を見物、食堂で日本茶を喫し紋十郎の說明で「紙治」の小春「釣女」の醜女などの人形の精巧さに感嘆した。

✕神戸で未曾有の盛況を示した松竹家庭劇は廿日岡崎初日をトップに四日市、岐阜、豊橋の各地を「後家の心境」「藝者アパート」等の名作陣を提げて巡業し三十一日初日で京都南座十一月興行出演

道頓堀

御購讀料

一年（十二冊）二圓二十錢

御申込みは編輯部へ

★壽三郎、長三郎、霞仙、吉三郎、段猿、芳子箱登羅等の一座で廣島（一日初日）を振出しに

連日滿員、また滿員の盛況をかち得た扇雀小太夫等の東西合同若手歌舞伎は、のち神戸、京都に連戰、至る所連勝また連勝のタイトルをかざして、十一月は勇ましきばかり元氣一つばいで、浪花座に歸つて來た。顏觸れは菊次郎らにかはり、延三郎、それに延之助、延二郎兄弟その他の精鋭が加はつて精彩また一段といつたところ——

第一大朝連戰、吉川英治氏原作瀨川春郎氏脚色野淵昶氏演出「續宮本武藏」二幕五場（火の卷、水の卷）第二「近江源氏先陣館」盛綱首實檢の場、第三（これは小唄家元連中の出演で各優の小唄振り）「色揃秋一諷」第四宇野信夫氏作野淵昶氏演出「雪地獄」三幕、第五「乘合惠方萬歲」（常盤津文賀太夫社中）（一日初日毎日三時半開演）

▼角座——近來また當るべからざる人氣を得てゐる關西新派五の替り、呼びものは、何んといつても邦枝完二氏原作大毎連戰の「浮名三味線」だらう。額田六福氏は原作に盛り上る興趣をそのまゝに舞臺に現はさうとして苦心したとある。

その他は第一柳川敏氏作木下計治氏演出「地下室の午後」、第二龜屋原德氏作「生ける生母」三幕五場（好評なので四の替りより續演）（一日初日晝夜二回）

▼九、十の二ヶ月に渡る本格興行に古典の粹に强靱の立場を示した文樂座は、十一月駒、長尾、相生、呂、伊達等の花形太夫連、三味線は大御所友次郎、叶等、人形は榮三、文五郎、紋十郎以下總出演で、初日は三日、新作義士外傳「馬方丑五郎」等を上場する。狂言は左の通りである。

第一「近江源氏先陣館」上使より首實檢、第二丁東詞庵氏作鶴澤友次郎師作曲「馬方丑五郎」第三「近頃河原の達引」猿廻しの段、第四の「鷓山古跡松」雪責の段、第五「東海道膝栗毛」赤坂より古寺まで

德山、宇部、小郡、博多長崎、熊本と中國筋より九州路を巡業。演しものは「齋式三番叟」「だんまり」「安宅關」「本藏下邸」長谷川伸作「股旅草鞋」「又五郎狐」等興味唆る陣容。

★十月歌舞伎座の關西大歌舞伎にタッタ一人の東京俳優として參加してゐる尾上多賀之亟の義理堅い幕內人らしい床しい行ひが噂されてゐる——同優は前名市川鬼丸と云ひ、先代鬼丸（後に淺尾工左衛門を襲名）の伜だが、その先代は明治劇團の雄、市川齋入の門人として薫陶を受けた時代があつた。

現多賀之亟はさうした亡父の因緣から去る三日急逝した右團次の葬儀にも死去の報と共に歌舞伎座より豐中の市川家へ駈けつけ、何くれと影に廻つて手傳ひで夜を明かし次の夜も、お通夜を二晩も續けて故人の冥福を祈つたと云ふが、事情を知らない幕內の人々はオヤ親類かと古老に尋ねて樣子を知り、それにしても義理堅いと感心してゐるが、ひとは斯くありたいもの——

紅山文人

水谷八重子の巻

水谷さんが舞臺に現はれると、婦人娘、特に藝者さん達が息づまるやうな視線を送つて居る。一寸下頤ぶくれな顏と妙にかすれた聲とが婦人達にはたまらなく魅力であるらしい。樂屋は何時も御婦人ファンの訪問で滿員の盛況である。

『水谷さん今日は寶塚でお逢ひした時より一寸痩せたやうですね』

化粧臺でセツセとお化粧をして居た水谷さんの顏が鏡の中でニヤツと笑つた。私の顏が鏡に映つたからである。(イヤ恐縮)

『このまゝで御免なさいね』

と、云つてから、

『少し位痩せたかも知れないわ、苦勞するせいね』

『ホホツ、どんな』

と、私はすかさず切り込んだ。

『兄を失つてから、うんと仕事が一度にふえて來たのよ、いい脚本を探すためには色々の本を讀んで見なければならないし、見つけても、未知の作家の作品であつたり、初めての演出家だつたりすると、その人達の性格や癖を呑み込むまでが大變です、作家、演出家俳優の感じ方がちぐはぐだつたり、探し合つて居るやうではいゝ芝居など仲々です。川口松太郎、金子洋文、川村花菱先生等は癖が分つて居るので非常に演じ易いので助かります。こんな時に兄が居たらと思ふことが時々起ります』

と、竹柴氏の追憶を新にして淋し氣です。

『好きな作家は！』

『菊地先生のものはどつさり讀んで居ますが、自分が讀んでみて、自分の役

がありさうな作品を書いて下さる作家が好きですわ』

『リアリスティクな言ひ方ですね』

と、笑ふと、

『作品の中の人物に自分の性格を見出すことは、その作家の性格にも共通點を持つことなのだから、演じ易く、作家にも一入の親しみを覺える譯になりますわ』

『では想出になるやうな作品は』

『出來ない役を一生懸命にやつた時や難しい役が案外巧くやれた時で、やり易いものは後では想出にならないやうな氣がします』

『やりたいと思ふ作品は？』

『西鶴のものや、眞山先生のもの、それから紋章など如何してもやつてみたいと思つて居りますわ』

『戀愛に就いては？』

『至上主義ですわ、でも勿論近代的要素を備へた戀愛なのよ』

瀧蓮子の巻

關西新派の瀧さんと云へば、獨自な心境と藝風とを見せ、インテリ層に多大の支援を持つて居る。それは瀧さんの洗練された技巧と云ふより、本質的な智性とエロチシズムとを兼備して居ることによる。

理智的な女性には妥協性がなく、情熱的な女性には批判力がない。瀧さんの自己經驗によるモダニズムが、俳優藝術として一個の新らしき女性を舞臺の上に創造して見せて居る。其處に瀧さんの優れた表現を見出せる。

『瀧さん！お顏の色が悪いが、何か煩悶でもありますか？』

『いゝえ、勞れるだけよ』

『では藝術上の煩悶は？』

『さうね、幾分あつたわ、私は新劇出ですから新劇に進みたいのですが、生活を考へるとき、現代新劇の現狀では問題が別になつて來ますのよ、で仕方なく、新派劇と歩調を合はせながらも自己を失はないやうに、一つの目的に向つて勉強し、新派とか新劇ではなく自分の勉強する方向に向つて歩きたい

と思つて居ましたが、結局いゝ脚本がなければいゝ芝居は出來ないと思つて居たのは誤りだつたことが漸く悟りました。

新派ではその深度が深く子役時代からの人が上手なので、その藝には到底及びさうもなく、新劇に進むにしても現在新劇が社會的にはそれ程の役割を演じて居ないやうですし。何だか意識的に遲れて居るやうに思はれ、惡い癖があつたり、藝術的に墮落して居るのではないかと苦惱して居ましたが、前日、金子洋文先生が見物されて、よき忠告と指導とで全く新らしい光を見出したやうです。井上正夫先生からも、暗示と指示とを受けて大變嬉しく思ひました。

私などスター主義ではなく、ワキ役でもいゝから自分の藝術を磨くことが大事で、色々の役割を貫ふことは一つの勉強としてよりよき完成への過程としてより一層の努力がしてみたいと思つて居ます。私のやうなよき指導者のない人間は實力完成に努めるより外に途がないと思ひます』

瀧さんの藝術談は滾々として盡きない。

『では戀愛に就いては？』

『人生では仕事にしろ、戀愛にしろ、結局同一なんでせう。一人の人を愛し得ないやうな人は何をしても駄目でせう。戀愛にも大乘的な人を選ぶ可きでせう。さうでない場合は、自分の熱と力で理解させることです。私等、學校が女子商業學校だつたので英文タイプライターや簿記等勉強した勢か戀愛にも到つて現實的な撰び方を致します私の初戀は中年の人で尊敬から端を發しただけに、未だにその餘韻があるやうです』

狹ま苦しい樂屋では大分暑苦しくなつたので一寸新鮮な空氣のする處へ浮氣してみやう。

山岸しづ江の巻

前進座の河原崎長十郎さんに取つては、無くてはならない女優であり、女房である。鼻の並はづれて高い彼女の容貌は、明晰な頭腦と鞏固な意志とを

表示して居る。

『山岸さん、十月の前進座は最後迄大入りで、記錄的興行成績をあげて居ますが、前進座が大衆に斯ふまで迎へられる理由を説明して下さい？』

『役者自體が皆良心的だからでせう。既成劇團のやうに、スター本意で脚本を定めるのではなく、脚本によつて、誰が最も適當であるかを嚴選してから役割をふり當てるのですから、觀客に取つても、原作者の性格が迫力を持つて迫つて來るので、その眞實性と熱とに動かされるのだと思ひます。所謂大衆の心の眞實性に切實に反應することが、前進座の場合他の劇團より多いのではないでせうか！單に藝術を鑑賞する、芝居を觀ると云ふだけでなく、又私達の劇團では、各自が自己の生活を他の生活を堀下げて研究し、意識的に進みたい、磨き度いと努力して居る姿は實際涙ぐましい位ですの、その努力は、どんな形態でか舞臺に現はれるものと思はれます』

『作家では誰が一番好きですか？』

『坪内先生は別として、良心的作家の作品が好きですわ』

『坪内先生の場合は？』

『先生は私達姉妹に取つては第二の親ですもの、先生のシエクスピア劇には隨分出ましたし、想出深いのは、先生の名作『孤城落月』の千姫を演つた時です。今後幾度でも演つてみたいと思つて居ります。それに先生の心使ひは私達の着物にまで及んで居ましたし、また奥さんも眞實の子供のやうに愛して下さいましたから』

『戀愛と結婚に就いては？』

『戀愛至上主義ではありません、戀愛は心的向上の對照として撰び、結婚は生活の發展でなければならないと思ひます。古來の慣習による妥協や婦女三從の德など蹴飛ばして、お互の精神的生活的の向上に向つて鞭打ち、啓發し合へる對照を撰ばなければ無意義だと思ひます。戀愛は男女生活の發展を意味し、結婚は男女闘爭を意味するものですから。其の意味に於ても私達前進座では座員の戀愛と結婚の自由を認めて居ます。そして藝術をより一層引上げる爲にも戀愛も結婚も重大意義を持つものと思つて居ます。だから、前進座では座員の戀愛や結婚を世間に公然と發表して居ます。そんなことでその人の人氣が低下するやうでは眞の藝術家、俳優にはなれないと信じて居ます又私達の劇團の長所は配役を合議制にしてあるため、技量あれば新人でもどし〳〵抜擢することにしてありますから俳優自身も非常に幸福と思ひます』

『いや、御高説有難ふ御座居ました。前進座の將來には多大の期待をかけることが出來て、嬉しく思ひます』

これで、山岸さんと私との會話は終結したのです。（以下次號）

阪東好太郎の秀頼　・　山田五十鈴の千姫

大阪夏の陣

一キート作特都京・員動總竹松
司茲井藤・助之貞笠衣・色脚
平公山松・影撮・助之貞笠衣・督監

・解説・これは元和元年五月。恰かも端午の節句に當る五、六、七の三日間に於ける大坂落城悲史に絡る家康、本多佐渡らの深謀、秀頼、千姫の苦惱、淀君、大野治長らの誤算等を經とし、坂崎出羽守、柳生但馬守らの德川外様大名の制度に對する憤懣、老獪な政治の傀儡に踊らされる悲運を緯として、大坂夏の陣を表から史實を重んじ、興趣を盛つて幅廣く底深く描かうとするものである——。

・梗概・舊暦の五月とは云へ季節は恰かも七月位の暑さで、ヂリーと焦げつく樣な炎熱に滲み出る汗と埃と渦卷く砂塵に泥だらけとなつた坂崎出羽守の率ひる一隊がそこには戰の影と云へば遠くに聞える砲彈の炸裂する音しか聞えないといふ、戰場を遙か離れた場

讀者通信

觀劇の常識

永樂庄三郎

劇の最中に○○屋！△△!!と大向ふの叫聲、クライマックスニ最負々々の呼聲は劇場全體を明朋な雰圍氣に浸して、舞臺と觀客の間を親密にする誠に結構。然し之れも程度ものの、野卑で惡趣味なのが盛に出るには、閉口して了ふ。愁嘆場、濡場等の最高潮に場内全體が劇そのものに陶醉中の夢を驚かす無情な皮肉な大聲に、どッとして折角の氣分が全く壞けて了ふ。半疊の内幕は知らぬが何時も決つた時に、待ちかまへて相當に考へた言語で彌次るには眞面目な觀客にとつて迷惑千萬である。芝居を娯樂的に酒でも飲みながらの見物には面白からうが、「舞臺藝術を味ふ」と言ふと六ケ敷しいが一般ファンにとつては僻易の外はない。

ペチャクチャ口を動かす婆さん連及び之に類する人々、昔はこうだあれはあゝだと、出語りや歌舞伎臭を何所迄も有難過ぎる程で、劇の最中にも盛に不平を列べる、其處ら邊りを汚すには、隣り近所の席に居る者も氣が散つて全くやりきれぬ。理窟は何うでも付けら

所に後陣を承つて豊臣方の落武者拾ひに退屈しきつてゐるところから物語は始められる。

今度の戰ひにも家康の深慮は矢張り譜代に厚くして外樣に薄く、これら敬遠された外樣大名達が戰功を立てたいにも極めて不利な立場に置かれるに反し、譜代の家臣に出來得る限り功名手柄の機會を與へて恩賞をとらしめ、これを將來有利に惹きつけて置かうとする家康一流の操縱法だけに、譬へ出羽守の如き勇猛果敢の將たりともこれを悉く後陣に斥けて松平、藤堂らの譜代大名を以つて先陣を固めてゐた。——

これを換言すれば如何に家康が戰機を見るに敏であつたかゞ窺はれる次第で、即ち家康は此時既に七十二才、老齡期の生涯も殘り少ない事を自覺する丈に、此際大坂を亡ぼし天下を掌握して置かれば秀忠の代になつて果して自分の偉業が成就されるや否や甚だ危まれる一方、秀吉沒後、秀賴成年の日迄との約束で預つた政權も此時より二年の後には返さなてはくならず、さうなつては一切の野望も水の泡となることを知ればこそ無理からでもこの夏の陣を誘發し、この一戰に依つて天下の覇權を手中に收めて置きたかつた。

從つて一度び天下が治まつた曉外樣は信賴するに足らずとし、恐らくは、これが最後の大戰爭となるだらうこの際、出羽守ら外樣が如何に戰功に焦つて前線出動を熱望しても許されなかつたのは、當然であるが、斯うした深慮遠謀家であるところの家康の腹の中を、早くから見拔いてゐた者に、出羽守とは浪人時代からの親友であり同じ外樣の位置にあつた柳生但馬守といま一人は家康にとつては實に敵方の將たる秀賴の二人であつた。

一方、大坂方はと云へば多くは浪人者の狩集めから成る兵力、然も冬の陣の直後、外濠を全部埋め盡した今日では流石に難攻不落を誇つた日本一の名城も、兩手足を縛つたも同然で、如何に眞田幸村など云ふ智勇兼備の猛將が居ても到底最初から勝目のないことを悟つてゐた秀賴は、家康にとつては孫に當る秀忠の娘で、自分にとつては名ばかりの妻である千姫を何とかして祖父や父の許へ無事に返してやらうと秘かに苦心するのだつたが、母の淀君はたゞ勝氣一方の無智な女で、只管に家康を憎み、果ては千姫を德川方の人質なりとして大野治長らが千姫を使者として德川方へ和議を申込んでは如何との獻策をも斥け飽迄も千姫は人質であると云張つて歸さうともしないが、淀君を知る秀賴は今更强いてこの母に楯つかず秘かに落城の悲運を託つのみであつた。

大體、千姫が秀賴の妻として大坂城へ輿入れして來たのは秀賴十一歳、千姫七歳の幼年時代で、それから十二年、云ふまでもなく政略結婚の二人の間には未だ夫婦の契りさへ結ばれて居らず、お互に「人質」として見るべく考へるべく教育されて來たのだが、その二人が今、目前の悲境に立つた時、殆めて夫婦としての愛情に目を醒し、秀賴は千姫の無事をと希ひ、千姫は又、城に止まつて秀賴の妻として生死を共にと願ふのであつた——。

家康は最初から秘かに千姫の身を案じてゐたが、大砲が天主閣に炸裂して火を發したと聞いては凝つとしては居られず、秀忠とても同じ心情で千姫救出を案じそのためには秀賴、淀君の助命をさへ許す考へでゐたのだが、家康の腹心本多佐渡に抑へられて果さず、みすみす千姫を敵の手中に見殺しにすることは肉親として堪えられぬ

れるが敬老とは言ふものゝ、昭和十何年の劇には其れ相當の變化はあるもの、新しい氣分で觀て欲しい。

近頃公德心とか、國民訓練の喧しい折柄先づ芝居見物からお互に反省の要がある。

幼兒を連れて行くのも考へものだ。

案内係諸氏諸嬢も意を體して宜敷しくリードの程を渴望するね。

苦痛であつた。この間のデリゲートな事情を誰よりも一番よく知つてゐる者は外ならぬ本多佐渡ではあつたが、彼は最後まで己の術策であるところの大坂城内に忍び込ませた間者が千姫脱出に成功するものと信じてゐた丈に家康を抑へつゞけて來たが、偶々その間者達が悉く捕はれたと知つては一刻の猶豫もならず、自らすゝめて千姫救出を進言した結果、尻ごみする大久保彦左衛門以下の旗本達を退けて敢然とこの役目を買つて出たのが戰功に焦る坂崎出羽守であつた。首尾よく成功すれば十萬石の加增と、然も千姫までも賜るといふ吉報には出羽守自身よりも幕下の七人衆は如何に雀躍りして喜んだことか——。

（林長二郎の坂崎出羽守）

そして主從八騎が火焰渦卷く城内に馬を乘入れ、火柱狂ふ天主閣の綱戸の中に身を挺した出羽が己の容貌を損じてまで無事千姫救出に成功するまでの心境は只この事に依つて賜る十萬石の恩賞のみが目當だつたが、清水谷の百姓家に今靜かに千姫を憩はせた出羽守は茲に始めて家康の戰略の一切を知り得、彼女の哀れな心情にいたく同情して、千姫に代つて秀頼、淀君の命乞ひをすべく家康、秀忠に迫つたが、早くも千姫が無事城外に在ると知つた家康等は言を左右に構へて出羽の努力は容れられず已むなく水車小屋に戻れば既に意を決した千姫は祖父や父の無情に泣き乍ら歸城をせがむ、出羽千姫に味方して家康に背信、彼女を大阪城に連れ戻さんとしたが、時既におそく大坂城は落ちて秀頼、淀君共に自害して果て、家康からの迎への駕が到着した。だが飽迄も秀頼の妻であらうとする千姫は父祖の乞ひを斥け、出羽守また千姫を護つて讓らず、圖らずも茲に外様、譜代の軋轢は表面化したが因より外様を快しとせぬ旗本のため、出羽は遂に謀叛人と見做され醜い同志討が展開されんとする時最後まで出羽にとつて良き友である柳生但馬守が自ら迎への使者として來り熱血一途短慮の出羽を諄々と説いて千姫引渡しを承引させる。が——それは七人衆の到底承服するところではなかつたが、慌たゞしい戰場のひとゝきに現出した美しい千姫のそれにも增して麗はしい心根を凝ツと抱締める出羽と、顏半面の大火傷に苦しみ乍らも不當なものに對する、正義感と最後まで優しい庇護を盡して呉れた出羽に對する感激に打ふるへ乍ら千姫は、今、迎の駕の中で謀叛人としての彼への命乞ひに心をはずませてゐた

繁華街に近く、交通至便
閑雅な和洋室！
◇モダン階上浴室新設◇
南地ホテル
一宿 三圓 額 南地戎橋電停前
二圓半 憩
一一半
電話南四一四・四四一

★

梗概　信州富士見高原へ療養に來てゐる宗方子爵夫人の妹朱實(田中絹代)は、妹京子を伴つて霧ヶ峰へハイキングした折、グライダーを操縦してゐる、工藤一平と知巳になつた。宗方家には朱實の從姉で二つ年上の歌子といふ二十一になる娘がゐた。歌子には、フランスへの遊學を控へてゐる野上といふ若い畫家があつた。野上は頻りに戀の垣根を乘り越えようとしたが、歌子は結婚するまでプラトニックでゐようとするのだつた。

新道

（朱實の卷）

松竹大船映畫・五所平之助監督

朱實は青木といふ父の配下の外交官が信州までやつて來て言ひ寄るのが煩しさに、京子を連れて突然東京へ歸つてしまつた。そして一平を訪れて、自由な戀愛を語るほど親密だつた。其の翌日、一平が朱實の邸を訪れた時は朱實たゞ一人、而かも、防空演習の夜だつた。……其の後、朱實は輕井澤の別莊にゐたが一平を招いて父に合せた。然し青木を見込んでゐる父は一平を正當に觀察しなかつた。

一平は朱實との結婚について母に相談したが、母の士族風な頑迷さのために二人の眞劍な希望も打ち碎かれてしまつた。然し二人は堅く信じ合つてゐた。或る日、朱實は自分が姙娠してゐるのを知つたので、一平にすべてを打ち明けて一日も早く結婚しようと決心し一平の會社に電話をしたがなかなか通じない、辛つと一平の弟良太に通じたが(外には號外の鈴の音)一平の飛行機が墜落したのだつた

(前篇朱實の卷)

洋酒・食料品　罐詰問屋

株式會社　横山商店

大阪市東區豐後町三番地

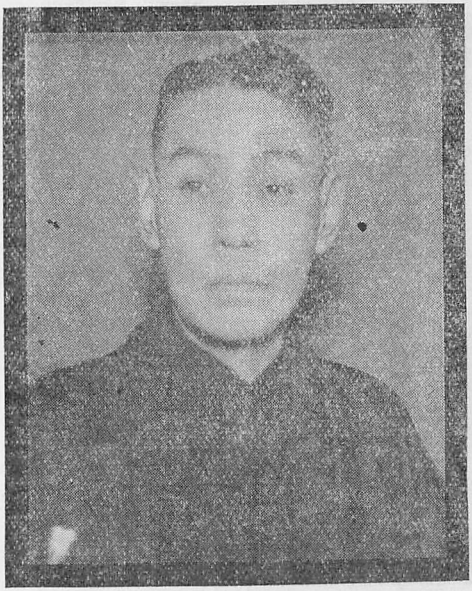
電話東94代表三八六五番

振替口座大阪一八四七番

創業明治五年

市川右團次一代記

大川澱江



屋卯之助の二女お竹の養子と成りお竹との夫婦間は極めて睦じく都合五人の子供を擧げたが皆夭折して末子の福太郎が只一人生き殘つたのが先代市川右團次（後齋入）である。俳優としては名門の家に生れし市川右團次は明治十四年二月二十四日（陰暦一月元旦）日の出と共に大阪南區笠屋町太左衛門橋北詰の自宅（今の湖月堂）で呱々の聲をあげた。二歳の時父右團次に伴はれて上京したが三年の後、十七年三月、角座改築開業式を擧行し、父右團次は座頭の位置に据りし時歸阪した、此時の式は中々盛大を極めて、其當時は實にハイカラな開場式であつた、座頭は父右團次、仕打は大清事和田清七（アンボウの親方）右團次は鶴屋、本姓伊藤を名

天保年間、四代目市川小團次丈（名人小團次と呼ばれし人いまだ市川米十郎といゝし頃、大阪道頓堀立慶町（今の櫓町）にいろはといふ芝居茶屋、鶴

先月の印象

大橋孝一郎

◆南　座（新國劇）

近頃の新國劇はあらゆる角度からして百尺竿頭一歩を進めた。例へば曾ての新國劇から聯想した或る種の氣障ツポさが漸次薄れて行つて、劇團自體に一ッの風格を具へるに至つたるが如き、その最たるものと云つて良からう。これは劇團の人々の倦まざる修練から齎されたる演技の進境を物語つてゐる譯であつて此の劇團の爲に、眞とに喜びに堪えないところである。僕は南座の澤正迫善興行に一座の眞面目な舞臺と、緊張し切つた精神力とに接して、大きな力に打ちのめされたのであつた

狂言の内では小平次神樂が、殊に第一幕の人物招介法が面白かつた。これは歌舞伎の世話だんまりや殺し場を思はす舞臺技巧で、作者の野心が滿々と漲つてゐた。此處ではあらゆる人物が、一ッの「間」を持つて登場するが僕には大江戸に巢喰ふ與太者の、夜の生活詩といつたものが感じられて面白かつたのである。第二幕目になつてからも、何處に重點を置いたとも見えぬ此の至難な脚本、淡々たる

乗り伊藤右之助の名を揚幕に提げ座元を勤める、僅か四歳これが舞臺へ上つた初であつた、俳優としての初舞臺は明治十九年角座の、右團次、鴈治郎、壽三郎（先代）巖笑の一座にて（伽羅先代萩）にて三股川高尾丸御座船の場で太皷持福八に扮し（金時が〳〵）の舞を舞ふたのが六歳にて、爾來引續き父の一座に出勤中、二十四年七月京都常盤座（今の明治座）で夏祭浪花鑑と鎌倉三代記に父右團次の團七九郎兵衛橘三郎の釣船の三婦、三代目延三郎の一寸徳兵衛と鎌倉三代記は橘三郎の佐々木高綱、延三郎の三浦之助、徳三郎（後璃寛）の時姫といふ配役にて初日は出た、然も其初日には祇園、先斗町の高島屋黨の總見物があつた、右之助の右團次は、三婦の内の場にて（特に書入れし役）三羽鶴の卵の吉、堂島の地車引の形りにて地界の若イ者に扮せし、門弟の才五郎、團平の二人を連れて出で、花道にて二人を投げ『出過ぎた子供と皆さまのお呵り受けるとしり乍も、返り三升が松川の菱にからみし蔦かづら』といふ樣な（ツラネ）をいふ役柄になつたが、どういふ物か一ト言も舞臺詞をいわない。舌が硬張つて口が利けなかつたのだと後で知れたが一時は大騒ぎ、總見物に來た右團次黨の奇麗首は手に汗を握り、大向うはワイ〳〵と囃し立てる。右團次は、心中一生の恥辱父母への不孝、生きた心地も仕なかつたと子供心に觀念の目を閉た程であつた。これには原因のある事にて幼年の時、緣側で水遊びをして居たがどうした機みか前栽へ轉び落ち、植木鉢にて强か腦天を打つた事が原因で十分に物が云へなかつた、父右團次も非常に心配し手を替へ品を替へ治療させた、其日の失策も或は夫れが原因ではないかと、父右團次も甚く胸を痛めて翌日から欠勤する事になつた。仕打

内にやりこなして行く處に、此の劇團の進歩を認めたいのだ。

海の兄弟は辰巳と島田が相反した兄弟の性格を巧みに描寫して脚本以上の芝居にしてゐる。脚本の點からのみ云へば第二幕目は無くもがな、一幕物としてまとめ上ぐるべきではなかつたゞらうか。長島、二葉、山路等の勝れた女優軍に惠まれてゐることも、十分此の劇團の誇りとするに足りる。久松の老母は一本氣な氣質を巧みに演じて、舞臺を一層魚臭い雰圍氣に包んでゐた。

仇討禁止令は辰巳の重厚な持味が良く役の上に適合されて、定石的だが見て居れば面白く樂しめる。

最後の殺陣田村で一寸嚴肅な氣持になつて打出しとなるのが、追善興行らしくて良い。

◆浪花座（前進座）

近頃は「熱と意氣」を賣り物にするのが一ツの流行となつてゐるらしいが、眞とに結構な傾向だ。が、熱と意氣それだけでは芝居は出來まい。云はゞそれは心構へに過ぎないのであつて、結局は矢張り「藝」の問題が肝心だ。

此の劇團の演じた勸進帳がそれをよく物語つてゐる。長十郎の扮した辨慶は、熱もあり意氣もあつて眞とに結構だが、未だ未だ藝のふくらみや丸味と云つたものは足りない。あゝ荒ツぽく振舞はれては、幾ら辨慶とは云へ困つたものだ。殊に後半に至つて此の感が深

の大清は父右團次を訪うて、まだ子供の事だから今休業さすと反つて夫れを氣病みし舞臺へ出る事を恐れる樣にならうから、夫では末の爲宜敷からず、ボツ〳〵舞臺詞を操る事を敎へ一日も早く出勤させて呉れと染み〴〵歎願的に訴へたが、父右團次は胸に如何なる思ひがあつたか口を閉ぢて承知しない大清の外に願出べき人はなく右團次も子供心に心外に思つて居ると大阪に留守居をして居た祖母が聞き附けて早速京都へ遣つて來たが、一ト目右團次を見ると共に最う同情の涙に暮れ、是非にと父に迫つたので親孝行の齋入翁、母の詞を背く譯にも行かずと漸くの事で承諾した、祖母も素より母共に石切神社に心願を籠め、一生懸命稽古にかゝつて再び舞臺の人となつたが、今度は見事にやつてのけたので初日の不名譽を恢復し親子共に愁眉を開いたのは芝居も千秋樂の日であつた。

明治二十七年六月は備後尾の道階樂座へ乘り込み『五三桐手染石川』葛籠拔の五右衞門を開演したが六月八日初日に父右團次が葛籠拔けの宙釣りから落ちて大負傷をしたので五郎市を勤めし右團次共に備後の田島の骨接醫師の許で養生する事になり右團次は看護の爲滯留した、田島は僅々三十戸計りの漁村で聞く物とては松風に潮の音、見る物は海に山に草家計り、十三四歳の右團次は大阪の空のみ戀しく思ふて居たが、只一ツ面白く感じたのは漁船に棹さして釣魚する事であつた、無經驗の右團次生魚の釣れる筈はないが、或日辛ふじて一尾のコチを釣つた齋入翁は『釣りが出來た〳〵』と、前表を祝福して大よろこびであつた、此の一尾の『コチ』を釣る爲、右團次は眞黑な田舍男となつた、或日魚釣に倦きた、蜻蛉釣りをして居ると彼方より洋服姿の紳士らしき男が二人來り、ヲイ〳〵村の

結核にはオネワリン
淋病にはコナイン
…花柳病科…
藤原醫院
★戎橋筋溝ノ側西入 ★ 電話戎二六六〇三六六番 ★
淋病にはコナイン
結核にはオネワリン

子〳〵と呼ぶので振り向いて見ると中村玉七、實川延三郎丈の二人であつた處が右團次の黒いので氣も附ず『高島屋さんの宿は』と聞く、右團次は可笑さを怺へて只ニコ〳〵と笑つて居ると『オ、』と始めて心附たのは延三郎丈であつた、是は二人が大阪より見舞に來たもので果は大笑であつた。（續く）

課外ばなし

食道樂

比左次

爽 涼淅く衣袂に迫り、天高くして馬肥へ、給額低うして人瘦せる、虫聲唧々として蘿中うたゝ寂寥を覺へぬではないが、何がさて、爰許食味更まつて芳醇頓に慕はしく紺の割啜簾をもれてプーンとくる「おでん」の匂ひが一入懐かしさを增して來た。鼈甲に振り葱、蛸の足に芥子を利かしたら又飲める、もし夫れ、半札をしのばして刺身に土瓶むしとなれば銚子の數もセメント會社の煙突程に並ぶであらふ、今樣源太もどきでオーバーでも質におき、サア飲み給へ、清め給へ、そして勘定拂ひ給へ……。

爰 に北區東野田町……と言つたら凡そ食味界とは續遠いが……と御不審もあらふけれど、マア待ち給へ、雅趣量な板塀構への料亭があつて家名を「たぬき」と呼ぶ。一間路次の石疊を輕く踏んで玄關を入ると左側に八疊計りの洋間があつて「ようまアお越し」と迎へてくれる、椅子卓子その他調度品を一瞥すると、どうやら誂へて作つたもので出來合ひじやないらしい、尤、此家のおかみさんはどうか知らぬが……。

料理は會席が建前であるが手輕な割にはなか〳〵美味く喰べさせる、それにお伺ひ料理も承るから新地あたりで遊んだ後で「どうだい、御飯でも喰べに……」てな粋樣向きには手頃な家だ。

そ れに至つて閑靜だから虫の音でも聞きながら根引きの相談にもよからふし、値引きの談合にも相應しからふ、どの座敷からも糸の音は聞へぬが、御法度といふ譯でもなく爪彈きの小唄位はお許しあるやに聞及ぶから、願ひの向きは仲居を通じて「おかみ」に伺ひ給へ。聞けば此家の客筋は文人墨客でどの座敷にも俳畫俳句が多く、取分け月斗子、秋双子のが眼に立つ、昭和の俳聖たらんとする○君は一度參見あつて然るべし……だ。

大入りを
覗ふたぬきの腹鼓
客は座敷で
舌鼓打つ

く、例へば〳〵面白や山水に……あたり風雅な趣きに缺ける。結局此の狂言は所作事の一種だから、踊りを忘れた辨慶ではどうにもならないのである。幸ひ押出しの立派な人だから次の時代の辨慶選手の一人として、此處では將來へ期待を懸けるに止めやう。

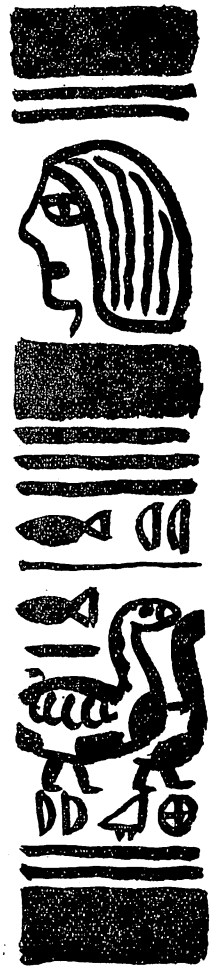
翫右衛門の富樫は山伏問答の後と「疑へばこそかく折檻」の個處にいゝ情味と肚とを見せた。思つたより悪かつたのは國太郎の判官で、形の上でも大いに今後の研究を要する。

「噛みついた娘」一體、かゝる暴露的內容を眞向から振翳した作品からは、曾てのプロレタリヤ演劇の場合の如く、やゝもすれば不快な感情を抱かせるものであるが、一人の東北娘を拉し來つて、この娘の眼に映じた世界として組立てた劇の構成と、村山氏の嫌味のない演出とが相俟つて、素直な內によく作者の意圖を掬取ることが出來た。

「人斬り伊太郎」は翫右衛門の一人舞臺で變質者の性格描寫と、大詰の演出や臺詞の緩急の工夫に、この作品を○○から救つて　翫右衛門藥籠のものとして成功してゐたのは讃められてよからう。此の人がかゝる役柄を演ると妙に變態的な粘りが出て來る。

◆中　座（井上水谷合同劇）

「彦六大いに笑ふ」の面白さなぞ既に述べ盡されてゐる。只一座に加つた山口俊雄を見て矢張り俳優は勉强しなくてはいけないことを痛切に感じた。



大阪劇壇のことぞも

木谷利夫

大川の流れ、船場、島の内道頓堀は言はづもがな、十年一日の如き京の東山さては祇園島原鴨川のせゝらぎにさへそれ〴〵に顧みれば激しい時代々々の變遷があつた。

譬へば伏見の京橋から三十石に乘つて横堀川から道頓堀に船を着ける私達の父母や祖父母ののんびりとした時代の回顧から、聽ては省電が何十分とやらで京阪をつゝ走りその儘そゝくさと地下鐵に潜り込みさへすれば南の歡樂境まで譯もなく辿り行の出來る時世の安易さは私達により進展する將來を考へさせ、大きな變化の跡をしみ〴〵とあれやこれや數えさせずにはゐられない。

女の心は昔乍らにヒステリツクで好色でとるに足りない十把一束の流行癖のみとは言へ、地唄が島の娘となり、人形淨瑠璃がヂャズ好みのトーキーと早替りをすれば勢ひ五座の大歌舞伎も何某のちやんばらにお株を奪はれる昨今の時世、止むを得ないと言へば、しかし止むを得ない事ではある

何も識らない。まるで譯の分つてゐない東京仕込みのインテリとやらが利いた風の口を利くのも時世なら、總てが安直に手取り早く藝も味もそゝらもないのが嬉ばれるのも時世である。

勿論歌舞伎や文樂の約束も味も趣も、はじかり乍らポツプの近代の娘とやらには判らないのが當り前で判つてゐるのが不思議と言ふものであらう。

一にも二にも東京流行關東崇拜が我國の國是とあれば致し方ない時世時節の成り行きで御挨拶の仕やうもないが、例へば大阪に於ける最高の古典人形芝居、四面楚歌の上方歌舞伎——批評家や東京物の新智識に小突廻されて影がうすいがかうした動きの美くしさ困難さは倒底江戸歌舞伎の肚藝とやら活歴とやらの比ではない。がこれも永嘆的な言ひ方をすれば段々と理解する人が尠くなつた。謂はゞ大阪にも田舍者が增えたのであらう。

東の老優が老の躬を某々劇團に追隨して股旅ものとか何とかに新機軸を出さうとする熱演の向うを張つて高砂屋や新駒屋のマダムバツタフライが化けて出さうな世の中、下剋上の亂脈、稅金が高くなつて利子がべら棒に安くなつて、諸式が上つて收入が減じて全〴〵どうもやり切れない氣持がする。

とは言ふものゝ鴈氏沒後の大阪劇壇は、併し決して盛大に赴いたとはお世辭にも言ふこ

とが出來なくなつたのは事實である。魁車、壽三郎等々の過分の熱演が殘念乍ら東西所を賛えた出しものゝ杜撰さに災されて、泥臭い感銘を與へられたのは一人私だけの印象であつたかしら……。どうもまだ大阪劇壇たるものの手探ぐりのだんまりの舞臺のやうで、何處やらに忍び三重の音がしてゐる。

と言へば昨今、中村扇雀氏が青年歌舞伎で餘り親爺の出物ばかりを演じるので、それがまた鳩治郎によく似てゐてとてつもなく上手いので、一言なからざる可からずと言つた東京の連中に、扇雀は獨自性がない、親爺模倣だと言ふ評が一般になつてしまつたが――、つまり大師は弘法にとられ田樂は茄子にとられた型で扇雀たるもの割が惡くどうすれば親爺と違つた型に見えるかと苦心をしてゐるやうに聞くが、新らしく出來た大阪勘彌會の世話役をしてゐる私の親戚の人が來ての話に、先輩模倣は青年歌舞伎の連中の誰も誰もがやつてゐる事で當然でありまたさうする事が役者の本當の修業になる譯だが今更扇雀一人が模倣だ模倣だと言はれるのは要するに扇雀それ自身に既に俳優として非常な天分があるためではないか、事實この黑い目で見て扇雀がどの程度の上手い役者であるかと言ふことは分つてゐる筈だと言つてゐた。つまり他の俳優は模倣をしてよく模倣をなし得ない點に勘く共扇雀より未まだと言ふのであらうか。

二十や三十そこ〳〵の若さでは何の職業をするにしても先輩の模倣を離れては存在しない。生仲獨自性などゝ言ふことを意識するのはそれ自身藝の行き詰りを意味するのだとも言へば言へるし、さらでだに大天狗、小天狗、烏天狗を初めとして總てこれ金太郎共の集りである藝界、ましてや傳統の多い型物に於て若輩共の中途半端の獨自性を出されたのでは見物する方こそ迷惑至極矢張り何處までも傳統を重んじ先輩名優の型を大事に名譽ある模倣を續けていつて貰いたいものだ。

ユニークな藝格と言ふものは自ら意識して出さうとしないでもその人の藝が完成されゝばされる程五彩の虹の如く美くしくその優を飾り立てるであらうことは少しく目を開いて世の中を眺めてみればよく了解のいくことである。

今回扇雀・成太郎らが從來の東京青年歌舞伎と袂を分つて道頓堀に所演したのはその間色々の事情があるにしろ昨今大阪に假政府が出來た位に注目す可きことでありその意氣の壯たる、些か關西歌舞伎のためだんまりの結末が近づいて來て、本釣が一つ鳴つた位の感があつた。言ひかへれば關西歌舞伎そのものゝ行き方にいくらかは見透しがついて來たのではないのかと言つたやうそんな氣持がするのである。

兎角大阪の觀客は持上げる方が先に立つて、出來れば矢面に立つことを避けるために、役者は役者で何とはなしに羽を延ばした氣持になつてのう〳〵と下らない下手な芝居を執諄く演じ乍ら間延びのした掛聲に脂下つてゐられるやうな危險が多く藝術の上から見れば溫床であると同時に墳墓でもある譯だが、大阪の觀客と雖も目のない譯でなし耳のない譯でなし感情のない譯でなし、其處の所は大阪一流の要領のいゝ五破算の實利主義で迎えられるも棄てられるも總て之れ無言、役者の腕次第熱次第、寧ろ酣豆腐は一口に限る式の盲目的な東京流の通人が尠いだけに實際は藝人にとつて渡り惡くい奔流と言へば言へないことはないであらう。折角奮闘努力、金太郎にならないことを祈るものである。

傍白

大木戸　徹

長田秀雄氏が東京の或る新聞に「劇場よ、作家をいたはれ」といふ一文を書いて、相當、各方面の話題になつてゐるさうである。その謂ふ所は「大小數座の劇場があり、新作毎月十數篇を要するに、ある五六の特定の作家の外、多數の作家が正に飢えんとしてゐるのは、何故か」と云ふのである。大小數座の劇場といつても、その云はんとする所は、勿論大劇場の「企劃」に對してゞはなからうか。そしてその長田氏の言葉は「大阪の場合」にも云へる事である。作家の偏用はいつの時代にもある事でそれが劇壇をマンネリズムに陷入らしめ、沈滯の原因を作るものである。所が皮肉な現象には、十一月の東京各座の出し物中殊に東京劇場の左團次一座なんかは、隨分新人の作品を起用してゐる。あながち、松竹は特定の作家のみに偏重してはゐない。良い脚本さへあれば、どし〳〵それを上演するの雅量と熱心さは持合してゐるが、その良き脚本がさうザラに出るものではない。興行は毎月の事だから、自然信用のある特定の作家に依頼するの安全策を執る結果となつてゐるのだらう。「大阪の場合」が東京よりはもつと甚だしい現象を呈してはゐないか。假に或る月の興行中、大阪朝日と大阪毎日の兩新聞の小說劇化が同時に二つの芝居で企劃されたとする。それは作家も少ない精だらうか、その二つの仕事を一人の作家がしてゐる事がある。その作家は限りある精力で、その二つの仕事をするのだから並大抵の努力ではない。無理が出來るとつひ、支離滅裂な筋の通らないやつつけ仕事になる。時代劇だのに「私と結婚して下さい」とか「私はあなたを愛してゐます」などとモダンボーイのセリフが飛出して見物を一驚させる事がないとも限らない。これは大阪の劇壇當事者が深く考へなければならない所だ。だが、當事者から云はせれば、大阪には餘りに作家がなさ過ぎると愚痴るだらう。その通り皆無といつても過言ではない。作家を養成しろといふ聲も久しい。然し、作家なんか「天分」を要素とする仕事は、養成されて決して傑物が出るものではない。只、彼等の練磨のために「劇場」と「機會」が提供されるだけだ。そんならどの作家にも均等に仕事をさせる事が一番いゝ事で、その間に、淘汰されるものは淘汰されて行くだらうし、浮び上るものは浮び上る。長田氏が東京に於て獅子吼（？）した「劇作家の生活問題」も、要は「作品の價値」が「生活の安定」を約束するもので、これは當事者に責任のない話だ。强いて當事者に望むならば、もつと作家に對する視野を擴げて、有名無名に係はらず、どし〳〵と登用すべしである。

×

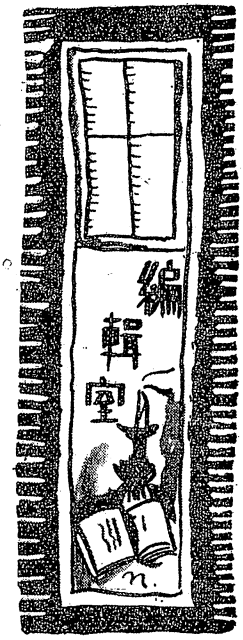
東京の青年歌舞伎が「生玉心中」を上演した。大阪の青年達が今月は負けぬ氣で「雪地獄」をやつてゐる。さうした對照は、今日では

何でもない事である。東京だから上方狂言が出來ないの、大阪だから江戸の物は不向きだといふ譯はない筈である。その以前、帝劇華やかなりし頃には澤村宗十郎が、「紙治」を得意藝として、よく出してゐた。大阪では故雀右衛門が芝雀時代に「辨天小僧」を出した。鳳治郎が「花川戸助六」をやつた事もある。これらは一種の「奇」をねらつた興行政策としての出し物だけでなく、俳優として何でも演れるといふ普遍性を見せる意味でいゝ事である。今月、浪花座に扇雀、小太夫が宇野信夫作の「雪地獄」をやつて、大いに菊吉を張らうとする。或ひは菊吉以上の自信を持つてのぞんでゐるかも知れない。若い俳優にしてさうした野心も結構なりと云ひたい。小太夫は元來が東京の人で、どつちかといへば上方物では仕勝手が大分違つてゐる。と同じやうに扇雀に江戸生粋の情緒はムツかしい仕事に違ひない。たまにはかうした問題作の上演もいゝが、扇雀には扇雀の持つ上方の味がある。逆に東京でも問題になるやうな、上方狂言の傑作をやつて貰ひたいものだ。徒らに東京の大家の上演した作品だからといふ意味だけで無檢討に再演するのは冒險の限りでないか。

×

これは大阪の俳優諸君に云ひたい事だが、毎月の興行に餘り忙しい精でもあらうが、當地には研究機關が少いやうではないか。東京には二三の俳優を中心に脚本を研究する團體があつたり、歌舞伎にも新派にも大部屋級の人達に依て、研究劇團が組織されてゐる。そして、それらの劇團は年何回か、適當な特別公演をやつたり、座談會を開いて、お互ひに向上發展のために努力してゐる。何の商賣にも「勉强」は肝心だ、うか〳〵してゐると時代に取殘されて、ホリゾントの向ふへ置いてけぼりをくつて、べそを掻かなければならないやうな悲境を招かないとも限らない。時代が變つて行くと同じやうに、芝居も變つて行く。三年前に見た芝居も、今日では古ぼけてゐる。三年前に見せた演劇技術も今日では通用しない。だから一日一刻と移り行く流れに沿つて、研究と修養が最大急の必要事である。大阪にもかうした俳優の研究團體が皆無かといふに、さうではない、松本錦吾、市川段猿、中村成太郎らがリーダーで「あかつき座」といふ劇團がある。結成以來十數回の朗讀會や試演をして來たやうではあるが、もう一つ表面的ではない。何故か、リーダーが同じ俳優といふだけに、文壇的にも社會的にも問題にされないのではなからうか、誰か良き指導格の作家を得てもつと積極的に進出すれば、きつと話題になる事だらうと思ふ。

徒らに錦吾などが演出家氣取つて舞臺裏を馳歩いた所が、所詮は既製俳優の「新劇ごつこ」になつて終ふ。錦吾も段猿も成太郎も、「あかつき座」の補導だなどと納まつてゐないで、自分達が卒先して矢表に立ち、相當な作家や演出家と手をつないで、何か目ざましい仕事をやつて貰ひたいものである。少しは大阪にも嶄新なものを普通興行以外に見せて欲しいものだ……。



ネオンの色がくつきりさえて秋も深くなつたと氣づく。

× ×

秋のやうに靜かな人柄だつた故市川右團次丈を相當ペーチをさいて追慕する事にしました。云ふまでもなく、故人は或る意味で大阪劇壇になくてはならない人だつた。高安吸江青木月斗、食滿南北等諸先生の玉稿は故人の面目を偲ぶに遺憾なきものであるが。さぞ故人も諸先生の御厚情には深く〳〵感謝してをられるだらう。それから阪東壽三郎丈語られる故人の話をボクが速記させてもらつて一つ、他に松竹の奥役で右團次家のことなら誰よりもよく知つてをられる大川澱江氏に御執筆を乞ひ、連載で「右團次一代記」と銘打ち、故人の興味的な話題をあつめていたゞくことにし、その第一回を本誌に飾るを得た。引續いて御愛讀希ひます。

× ×

西田眞三郎氏の「新劇の大劇場公演問題序詞」高谷伸氏の「文樂座よ進め」共に今日の問題である。此の稿の伸展するところ必ず皆樣の新らしい話題であることを信じ御多用中御執筆下さいました先生には多謝。

中間讀物、紅文山人の「女優百態」は正に百態であつて、筆者はどん〳〵人氣女優を訪問中。どうとんぼりせくしよん——愈々このところ大人氣、それからお馴染の妹背平三氏が今度文展に入選された。氏を知る程の者なら、むしろ當然と思ふだらうが、何はさて、めでたい〳〵。

× ×

「道頓堀」の鐵假面、大木戸徹氏とは何者？「傍白」いよ〳〵筆勢銳し、來月號の問題には何が上るかと編輯室でも大評判。

これから毎號、俳優さんの隨筆を載せ度いと思ひます。それも成だけ興味的な話を……

さて皆樣、今月の表紙は如何。鳥海青兒先生の御後援にあづかりました。御執筆下さいました諸先生には重ねて謹んで御厚禮申上げます。

（編輯・源多生）

昭和十一年十一月一日發行
月刊雜誌『道頓堀』第十一年第百廿二號

◇誌代は前金お拂を願ひます。
◇郵券代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の儒に應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目
廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越下さい。

一部 金二拾錢（郵稅壹錢五厘）

昭和十一年十一月一日印刷
昭和十一年十一月一日發行
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興業株式會社大阪支店
發行者 鳥江銕也
共同編輯 山上貞一
松本泰三
印刷所 道頓堀社印刷部
大阪市南區久左衛門町八番地
松竹興行株式會社大阪支店
發行所 道頓堀編輯部
編輯京都支部
京都市姉小路東洞院西
大橋孝一郎方

あぶら取紙始祖　辻占添附

スキナあぶら取紙

姉妹品

スキナ紙白粉

スキナ石鹸

專賣特許　常用新案

スキナ御化粧紙

（あぶら取兼紙白粉）

各品共御愛用を乞ふ！

登録商標

發賣元　大阪　朝日堂株式會社

本舗　大阪　中田スキナ屋謹製

いて御愛讀希ひます。

× ×

ました諸先生には重ねて謹んで御厚禮申上げます。

（編輯・源多生）

京都市姉小路東洞院西

大橋孝一郎方

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和十一年十月廿一日印刷（毎月一回）
昭和十一年十一月一日發行（一日發行）
「道頓堀」第百廿二輯（第十一年十一月號）

淺田飴

あさだあめ

定價
二十錢ヨリ
二圓マデ

本舗
東京
大阪
堀内伊太郎

たんせき一切
感冒、喘息
百日咳、肺炎
肋膜炎、虚弱症
咽喉の惡き人
聲の出ぬ人
老人小兒の
補血强壯劑

固形淺田飴

旅行、ハイキング、觀劇、演奏會
和洋聲樂會、放送、事務、其他人
混中に用ひて咽喉を保護し呼吸器
病を豫防する懷中藥

（全國各藥店にあり）

「道頓堀」 第百廿二輯 第十一年 十一月號

一部 金貳拾錢